GLOBAL DIALOGUE

3.4

5 issues a year in 15 languages

グローバル・ダイアログ：国際社会学会ニュースレター
第３巻　第４号　（2013年８月号）

Fernando Henrique Cardoso Looks Back
フェルナンド・エンリケ・カルドーゾの顧望

Sociology as a Vocation
職業としての社会学

Chizuko Ueno, Vladimir Yadov

Bulgaria Yesterday and Today
ブルガリアの歴史と現在

Mariya Ivancheva, Martin Petrov, Georgi Medarov

Social Science in Malaysia
マレーシアの社会科学

Shamsul A.B., Rahman Embong

> ファヴェーラ旅行
> バングラディッシュ縫製産業災害の背後
> あなたの論文は外注されていた
> 革命後のチュニジア社会学
> 映画の社会学
> ISA会員に安価な書籍を

NEWSLETTER

VOLUME 3 / ISSUE 4 / AUGUST 2013
www.isa-sociology.org/global-dialogue/

GD

International Sociological Association

> Editorial　編集部より

For a New Sociology　新しい社会学のために

集合的な憤慨が世界中に広がり続けている。最近では、(トルコの)ゲズィ公園とタクシム広場での動きがブラジルの主要都市へと広がった。そして私がこの文章を執筆している今、エジプトでは民衆による反乱が空前の大きさで再燃している。タハリール広場の群衆は、不確定さや悲惨な結果にもかかわらず、政治の(再)収用がおきていることに対し大変な拒否感を示している。これらは文化的には相互依存でありながらも、政治的には別個の独立した抗議であり、社会運動のあらたな理論の検討、そしてそこからさらにはグローバルへと射程を広げうるあらたな社会学を世界へ呼びかけている。

そのようなあたらしい社会学は、政治と社会の相関関係に取り組まなければならない。そこで本号では、マーケタイゼーションにおける市場主義の第三波、つまり口語ではネオリベラリズムとして知られているものについて、その政治的弱点をあばく。まずMallika　Shakyaは、バングラデシュで災害を引き起こした織物工業を対象にしたバランスの地政学を分析している。Bianca　Freire-Medeirosはブラジルの貧困を利用した継続的政治レジームにおけるファヴェーラのツーリズム振興を紹介している。Jeff　Sallazは出版社がアウトソーシングにより信じがたいほどの利益を得ているが、それは我々もしくは我々が利用する図書館が、我々がまさに創り出した作品をインフレ価格で買い戻すことによって起こっていることを分析している。そして個人史にたずさわるものとして、Rahman　Embongは、マレーシアの各大学が、短期間での利益と長期間の政治的無活動をもたらす仕方を見出すにつれ、社会学がいかにわきに追いやられてきたかを伝えている。

それでは、我々はどこにあらたな社会学を見出せるのだろうか。私自身は東欧、つまりポーランドやウクライナ、ルーマニア、東ドイツで台頭した批判的社会学者のポスト共産主義世代につらなる。本号ではブルガリアの若手社会学者３人が国民的議論に対し疑問を投げかけている。Martin　Petrovは、落ちぶれ果てた者のライフコース、つまりソフィアの路上で優劣を競う新旧両方のレジームによりばらばらと崩れ落ちた残骸を描きだしている。Georgi　Medarovは、以前の共産主義者――つまり幽霊のような存在感を与えているもの――を標的として逆行しつつ、しかしブルガリアをそのファシストであった過去から逃れさせる動機も加えるような、複雑な政治のパターンを追っている。そのするなかで、現代のファシストの傾向に注意が向けられる。Mariya　Ivanchevaは、ベネズエラへ赴き他の社会主義が抱えるジレンマを検討し、そこから東欧にむけての教訓と見識を得たことによる、自身の民主主義への変遷の初期について批判的に振り返っている。かれら３人皆が現在へとつながる過去を検討するような社会学を創出しようとしている。

あたらしい社会学は歴史と社会が蓄積してきた多声的な層を採掘するあたらしい方法を必要としている。それにはJordanna MatlonがJoyce SebagとJean-Pierre　Durandに対して行った、イヴリ大学の映画的社会学プログラムについてのインタビューを検討することから始めるのが最適であろう。彼らの映画的プロジェクトにつらなるものとして、私はここグローバル・ダイアログにフォトエッセイ(高画質の写真一枚と300ワードの説明文)を広く公募したい。

> グローバル・ダイアログは15言語に翻訳されており、ISAのウェブサイトにてご覧いただけます。ISA website

> 投稿についてはburawoy@berkeley.eduまでお知らせください。

フェルナンド・エンリケ・カルドーゾは、ブラジルの大統領を2期務め(1995-2003)、ISA会長にも一度就任している(1982-86)。先駆的な社会学者であり、本文では大統領職にあるものが社会学者であることの得失両面を論じている。

上野千鶴子は日本の知識人であり、活動家であり、社会学者でもある。彼女はフェミニズムへの登坂路を回想しつつ、それが日本において歴史的に得たものと今後の課題を評価・分析している。

Vladimir Yadovは、ソ連期におけるロシア社会学の先駆者であり、プーチン時代に社会学の自律性を守った人物である。また彼は、ISA前副会長で、多くの後進より愛されている教師である。本文では彼が直面した難題について論じている。

> Editorial Board
編集委員会

Editor: Michael Burawoy.

Managing Editors: Lola Busuttil, August Bagà.

Associate Editors:
Margaret Abraham, Tina Uys, Raquel Sosa, Jennifer Platt, Robert Van Krieken.

Consulting Editors:
Izabela Barlinska, Louis Chauvel, Dilek Cindoğlu, Tom Dwyer, Jan Fritz, Sari Hanafi, Jaime Jiménez, Habibul Khondker, Simon Mapadimeng, Ishwar Modi, Nikita Pokrovsky, Emma Porio, Yoshimichi Sato, Vineeta Sinha, Benjamín Tejerina, Chin-Chun Yi, Elena Zdravomyslova.

Regional Editors

Arab World:
Sari Hanafi, Mounir Saidani.

Brazil:
Gustavo Taniguti, Juliana Tonche, Andreza Galli, Renata Barreto Preturlan, Ângelo Martins Júnior, Lucas Amaral, Celia Arribas.

Colombia:
María José Álvarez Rivadulla, Sebastián Villamizar Santamaría, Andrés Castro Araújo, Katherine Gaitán Santamaría.

India:
Ishwar Modi, Rajiv Gupta, Rashmi Jain, Uday Singh.

Iran:
Reyhaneh Javadi, Shahrad Shahvand, Hamidreza Rafatnejad, Tara Asgari Laleh, Najmeh Taheri, Saghar Bozorgi, Faezeh Khajezadeh.

Japan:
西原和久(日本語版翻訳監修)、芝真里(日本語版編集事務局幹事)、姫野宏輔、高見具広、岩舘豊、池田和弘、福田 雄、三部倫子、堀田裕子、小坂有資、小杉亮子、土田久美子、前田豊、仲修平、加 瀬希和子, 大森美佐

Poland:
Mikołaj Mierzejewski, Karolina Mikołajewska, Krzysztof Gubański, Adam Mueller, Patrycja Pendrakowska, Emilia Hudzińska, Julia Legat, Kamil Lipiński, Natalia Jońca.

Romania:
Cosima Rughiniş, Ileana-Cinziana Surdu, Monica Alexandru, Telegdy Balasz, Marian Mihai Bogdan, Adriana Bondor, Ramona Cantaragiu, Miriam Cihodariu, Alexandra Duțu, Cătălina Gulie, Angelica Helena Marinescu, Monica Nădrag, Lucian Rotariu, Cosima Rughiniş, Alina Stan, Mara Stan, Elena Tudor, Cristian Constantin Vereş.

Russia:
Elena Zdravomyslova, Eleonora Burtseva, Anna Kadnikova, Elena Nikiforova, Julia Martinavichene, Ekaterina Moskaleva, Asja Voronkova.

Taiwan:
Jing-Mao Ho.

Turkey:
Aytül Kasapoğlu, Nilay Çabuk Kaya, Günnur Ertong, Yonca Odabaş, Zeynep Baykal, Gizem Güner.

Ukraine:
Svitlana Khutka, Olga Kuzovkina, Anastasia Denisenko, Mariya Domashchenko, Iryna Klievtsova, Lidia Kuzemska, Anastasiya Lipinska, Myroslava Romanchuk, Ksenia Shvets, Liudmyla Smoliyar, Oryna Stetsenko, Polina Stohnushko.

Media Consultants: Annie Lin, José Reguera.

Editorial Consultant: Abigail Andrews.

> In This Issue　目　次

編集部 より:新しい社会学のために 2

社会学者としての大統領:フェルナンド・エンリケ・カルドーゾとの対談 4

日本でフェミニストになること
by Chizuko Ueno, Japan 7

職業としての社会学:人生の定めとしての社会学者
by Vladimir Yadov, Russia 9

> CAPITALIZING ON POVERTY 貧困を生かす／付け入る

ファヴェーラ旅行
by Bianca Freire-Medeiros, Brazil 11

バングラディッシュ縫製産業災害の背後
by Mallika Shakya, India 14

あなたの論文は外注されていた
by Jeffrey J. Sallaz, USA 17

ISA会員に安価な書籍を
by Sujata Patel, India 20

> FOCUS ON BULGARIA　ブルガリアについて

２つの社会主義の狭間で
by Mariya Ivancheva, Hungary 22

ソフィアの街角で聞いた法螺話
by Martin Petrov, Bulgaria 24

ブルガリアのポスト共産主義者によるホロコーストをめぐる論争
by Georgi Medarov, Bulgaria 26

> SOCIAL SCIENCE IN MALAYSIA　マレーシアの社会科学

マレーシア形成期の社会科学
by Shamsul A.B., Malaysia 28

献身的な社会学者の人生と時代:Dato Rahman Embongへのインタビュー 30

> SOCIOLOGY LIVE　社会学の現在

革命後のチュニジア社会学
by Mounir Saidani, Tunisia 34

映画の社会学:ジョイス・セバーグとジャン＝ピエール・デュランとの対話 36

> President as Sociologist

An Interview with Fernando Henrique Cardoso

社会学者としての大統領
――フェルナンド・エンリケ・カルドーゾとの対談――

Fernando Henrique Cardoso氏

フェルナンド・エンリケ・カルドーゾFernando Henrique Cardosoは財務大臣を経たのち、1995年-2003年の2期にわたりブラジル大統領に選出された。ブラジルの独裁制の終焉を旗印として、彼は国際社会学会の会長も（1982-1986）務めていた。ラテンアメリカにおける依存と発展の相互作用を扱った先駆的な仕事で、すでに世界的に著名な社会学者でもあった。彼の博士論文はブラジル南部の奴隷制度に関する古典的研究である。ここでの対談は、大統領府を去った一年後にあたる、2004年アメリカ社会学会のクロージングセッションで彼が述べた事柄に基づいている。

MB：カルドーゾ「大統領」、社会学者であることは、ブラジルという決して小さくはないどころか巨大な国の大統領としての経験に、どのように影響したのでしょうか？

FHC：FHC：学問の世界でもそうですが、政治の世界においても、信念を持つということの重要性を私は感じています。何のヴィジョンもなく、何のスタンスも取らなければ、国家やコミュニティに影響を及ぼすのは不可能です。信念を持たなければなりません。もしかしたら、「政治的人間」に関して主張されているものとは真逆のものかもしれません。もちろん、みなさんと同様に、私もWeberを読みました。Weberは、信念の倫理と責任の倫理を峻別しています。けれども、彼は決して政治的行動の動因としてそれぞれを分けているわけではなく、どちらの倫理も考慮しています。彼自身はドイツ社会の代弁者であり、確固としたナショナリストでした。それゆえ、彼はそうした価値を持っていたのです。

もし、何らかの信念を持ち、それを適当なタイミングで表現できるとします。つまり、あなたの政治における時間の流れが市井の人々が持つ機微とタイミングを一にするものであれば、その人は政治的なリーダーになりえます。そのような能力がないのであれば、政治的なリーダーになることはできません。選出されたとしても、強い信念がなければ政治的なリーダーにはなれません。私の場合に関して言えば、私の世代は経済的成長への思いを抱いていていましたが、私の世代を動かしていたのはそれではなかったことを強調しておきたいと思います。民主化こそが我々の目指していたものでした。

私が直接的に政治と関わりを持った当時は、いまだ独裁主義的な政治体制下にありました。日常的に自由が制限されていることに私たちは苦しんでいました。亡命する人もいれば、収監され拷問を受ける人もいました。この事実が、私が政治的活動に参加することになった主たる動機です。民主主義的な信念、民主主義の教義を再確認することを意味していました。

MB：民主主義はあいまいで乱用されている言葉です。あなたにとってこの言葉はどのような意味を持つのでしょうか？

FHC：同じ価値観でも様々なヴァリエーションの、様々な体制を持つ色々な民主主義があります。今日における世界的な民主主義とは、単に政党に参加することが可能であるとか、選挙生活が送れるということではありません。私自身、厳密には党員であったことはなかったと言っておかなければなりません。党のお偉いさんでもなかったですし、そんなお偉いさんに嫌悪しています。初めての上院選にむけた政治的キャンペーンで、私は部屋を埋め尽くした軍隊とは真逆の政党メンバーにむけたスピーチのなかで、軍人こそくだらない人間であると述べました。

政党だけが政治を映し出すものだと私は考えていません。最近

>>

Arbuによるイラスト.

では、社会の大部分と接することができる能力、そして人々の多様な考え方に対応しつつ、信念を表明できる能力が重要であると考えています。

それゆえ、効率的に「政治的人間」であることには、人をひきつけ、コミュニケーションを取り、気持ちを喚起させるような能力が求められています。ある程度は役者にならなければなりません。ただ、劇場で行うように役を演じるというのではなく、「伝える」という役者の能力に関して、です。コミュニケーションを取り、人々の感情を感じて、そして自身の感情を伝える能力を持つことが必要です。もしかしたら、市井の人たちを好いているから、私は政治的リーダーになったのかもしれません。大統領職に就いているときは、私は一般の人たちと接するように努力していました。大統領は一般の人たちとはとても離れた存在になりがちです。でも、大統領にはウェイターが付いています。プールにいたとしても、気にかけてくれる人たちが付いています。ドライバーも、ガードマンも付いています。政治家や上流階級の人たちだけではなく、こうした普通の人たちが日々大統領のまわりにいます。私は、そのような人たちと会話の機会を持とうと努力し、彼らが大統領としてではなく一個の人間として私に語りかけられるように気を遣いました。また、彼らが実際にさまざまに感じていることについても、耳を傾けるよう努力しました。最近、私はパフォーマーの意味としての役者に徹するのではなく、発言内容に対して真摯にコミットしていることを示すように気持ちを伝えることで、影響を及ぼす能力が大事であると考えています。人間味を失うなということでもあります。

MB：社会学はあなたの人格形成に貢献しましたか？

FHC：社会学に負うところは大きいです。私と対立関係にあったブラジル人――政敵ですが――はかつて、よくこうおっしゃっていました。「貧しさを人生の中で味わったことがない人だ。ポルトガル語よりもフランス語の方が流暢にしゃべれる」と。私に政治を行う資格がないというようなことを彼らは主張していたのですが、ポイントをはずしていました。かつて海外で教授職に就く経験があったのですが、その経験から私は一つの教訓を得ました。そこらの知識人がしているよりも、もっとシンプルに、もっとダイレクトにしゃべらなければならない。というものです。

軍事独裁制から脱出した当時、チリで授業を担当し始めたころのことを覚えています。ポルトガル語とスペイン語は非常に近い言語ですが、同じ言葉ではありません。ブラジル人はスペイン語を理解できますが、逆はそうではありません。チリの受講者はポルトガル語で発音しようとしたすべての言葉に抗議してきました。だから、なるべくややこしい言葉を避け、簡単にしゃべらざるを得ませんでした。

社会学者にとっても、市井の人々と接するということ――みなさんも訓練を積んでいると思いますが――は大事なことです。「この男は、貧しい人や一般の人と付き合うことができない人間だ」と政敵が主張したとき、私は笑顔を返しました。なぜなら、私の社会学者としてキャリアは、黒人の方と一緒に住み、人種関係を扱うことから始まったからです。だから、私は南部ブラジルにある多くのスラムや貧民街を訪れました。のちに調査を労働者の方と実施しました。そして企業家の研究に移行しましたが、一般の人々との密接な関係の中でキャリアをスタートしました。だから、人々と付き合うことには何ら困難を感じたことはありません。

また、私は人類学を学んできました。我々は社会学、経済学、そして人類学の三つのディシプリンを同時に学んできています。ご承知の通り、人類学者――私の妻は人類学者でしたが――はとても個別的な事柄に注目します。些細な行動の変化を映し出すように、あらゆる人との会話を好み、記録を取ります。政治家にとっても、他者を理解し、会話する能力を身につけることが大事です。先に強調したとおり、自分の本当の所感をストレートに、そして鋭敏に伝えるという意味での役者になる能力が備わっているのであれば、この能力は自身の影響力を高めることになります。

MB：しかし、社会学はハンデになることもあったのでしょうか？

FHC：実際にはありました。上院選に向けた初めての政治キャンペーンを行った当時、私はシャイだったことを覚えています。ブラジルで政治キャンペーンを行うということは、人々と実際に触れ合うことを意味します。握手するとすごい力で握り返されます。一日が終わるころには、すごい熱狂で疲れ果てて憔悴しています。少なくともブラジルにおいては、政治キャンペーンは身体的なやり取りで、人と人とのやり取りです。単に会話だけではなく、実際に触れ合わなければなりません。近い距離にいる必要があります。これは何かしらの訓練を必要とし、始めた当初、私にとって簡単なものではあ

>>

りませんでした。

しかし、会話はもちろん大事ですし、学問の世界に生きる人間にとって大衆相手に話すのは簡単ではありません。シンプルに、そしてきわめて断言的になることが必要になります。そして、大きなお話をしてはいけません。民衆はそんな話は好んでいないからです。学問の世界に生きる人にとって、このような状況に順応するのは簡単ではありません。当初、参加したそれぞれの会合で違うスピーチをしようとしていたことを覚えています。そして、大事な点ですが、政治キャンペーンの最中には一日に8回とか10回の会合に参加します。同じアイディアを繰り返すことに私は恥ずかしさを感じていました。だから、聴衆が異なれば、違うストーリーを構築するように心がけました。つらい経験でした。

伝えたいことを誰も本当には理解してくれないので、何度も何度も繰り返す必要があります。単純化し、しかも繰り返す必要があります。そのような環境では、社会学者と政治家を両立させるのは簡単ではありません。でも、そんな環境からTVに移れば、かなり楽になります。私の初めて選挙戦だったサンパウロ州の上院戦で――当時のブラジルは依然として軍事政権下にあり、それに対するキャンペーンを張っていたのですが――、政敵との議論のためTV局に赴きました。議論の最中、私は比較的落ち着いていました。講義を行うかのようにしていたからです。

帰宅したとき、私の友人たちはえらく落胆していました。彼ら曰く、ありえない、お前にやる気が感じられなかったし、政治家が見せるべき気概を見せてはいなかったと。しかし、視聴者に与えた実際のインパクトは、この悲観的な分析とは逆のものでした。なぜなら、TVの場ではある種の対話――会合での公的なスピーチよりも、もっと私的な会話――がより求められるからです。だから、社会学者で教員であること、つまり、生徒との直接的な対話に習熟していたことによるアドバンテージを私たちは持っています。我々学問に生きる人間にとって、政治生活でTVのアドバンテージを引き出すことは難しくありません。端的に、そして自信をもって自分の考えを伝える良い先生を振る舞うだけで十分なのですから。

MB：大統領としてあなたはどのように政党と付き合ってきたのですか？

FHC：先に述べたとおり、ブラジルの場合は、政党ではなく国家のヴィジョンを示す能力が政治的リーダーには重要です。政党をないがしろにすることのコストを払ってでも、リーダーは国民の大半を納得させなければなりません。

よくあることですが、政党は変化を促すよりも邪魔する傾向にあります。革新的なことに対処する準備がありません。だから、政党構造を迂回する必要があります。同時に、成功するためには政治構造に究極的には依存していることを理解しなければなりません。対立してはいけないという意味です。政治体制と直接的にいさかいを起こすようになってしまうと、ある種の独裁者で終わるか、もしくは弾劾されてしまう危険を冒すことになります。

大衆を操作して議会と対立するように動員することもできます。TVを使えばそんなに難しいことではありません。しかし、このやり方は独裁制に向かいます。確固とした民主的信念を持たなければならず、国会が自分のやろうと努力している変化の邪魔になるからといって、民衆を国会に対立するように仕向けてはいけません。議会と継続的に交渉する準備をしなければなりません。ここでも再度社会学者として訓練していたことが有利に働きます。なぜなら、各政党を俯瞰してではなく、どんな集団やサークル、さらにはどんな人間がそれぞれの政党にいるのかを見ることで、何が本当の掛け金になっているかを理解できるからです。もちろん、市民が抱く関心から目を離さないことが最優先です。

MB：あなたは相当数の国家的危機を経験されてきました。危機への対処に関して述べるべきことは何でしょうか？

FHC：例えば、国際経済制度で無謀な投機が行われた時期のような危機の際には、冷静であり続けること、そしてしっかりと道筋を定めることが必要です。そうでなければ、すべてが崩壊してしまい、自分自身も国も沈没させることになりかねません。危機の時には、俯瞰的に理解できる分析能力を備えることが冷静になる助けになります。波風をたてるためではなく、ロードマップを提示して向かいたい方向へと進むために、距離を取る能力を備えつつ、それぞれのレベルで行動を起こし、状況に応じて国民に接する能力が必要です。

そのような危機の際に国家元首が最優先する務めは、崩壊のリスクにさらすことなく、長期的な国の利益を保護することです。もし、崩壊してしまった場合には、システムの再構築に多大な時間を要し、甚大な社会的コストを国民に払わせる結果になってしまいます。良い風が来たときに波に乗る能力、そして機会を逃さず、先頭を切るための能力を持つことがなぜとても大事 なのかを示唆しています。また、何よりも全体のシステムが瓦解することを防がなければならない悪い時機に対処することで、自身をより強くできるかもしれません。

これらが、社会学的なトレーニングとどれだけ関係があるのかと尋ねられれば、私はすごく関係していると答えたい。もちろん、その人の個人的なバイオグラフィーにも関係していますし、他の種々の能力とも関係しています。しかし、基本的に社会学者として訓練したことは、広い視野を与え、異なる集団間での相互関係を理解する能力を与えてくれます。また、絶対的な一つの事実が存在するのではなく、事をなす方法も一つではないことを認識する相対主義の考え方も持つことができます。

MB：最後に何か政治的なプロセスでの社会学的な含意はありますか？

FHC：私の意見ですが、現在の民主制における政治的なプロセスは、永続的な審議のプロセスを必要としています。ルソーの一般意思の考えに立ち返るなら、今日における一般意思は日々社会の成員によって再定義されていると私は考えています。より多くの国民が審議のプロセスに参加できるように、そのための場所を開けておく必要があります。もはや、投票だけが代表性を表しているとは言えません。今日における正統性は選挙のみに結びついているのではなく、自身の関心が向いている、ないしは求めている価値観や動因の永続的な再確認が必要とされています。

私は何百万もの票を何度も獲得しました。50%を超える得票率の支持を得て2期にわたり大統領職に選出されました。けれども、これだけの信任を得ても十分ではありません。日々、自身の正統性を再確認し、再構築しなければなりません。まるで毎日0から始めるということを続けているみたいなものです。一度人々の信頼を得たからといって、この点を勘違いしてしまう人もいます。自身の行動の指針となる価値観の再確認によって、人々の信頼を継続的に維持し、新たなものにしなければなりません。

だから、最後に一言だけアドバイスをお送りします。政治の世界に踏み込んではいけない。それは本当に難しい！（前田豊訳）■

> The Vocation of Sociology

On Becoming a Feminist in Japan

日本でフェミニストになること

by Chizuko Ueno, University of Tokyo, Japan
上野千鶴子（東京大学名誉教授・立命館大学特別招聘教授）

Chizuko Ueno.

上野千鶴子は日本における代表的な社会学者であり、フェミニズム批評家で知識人である。彼女は女性学のパイオニアであり、これまで多くの著作を発表している。その中には『家父長制と資本制』（1990）、『近代家族の成立と終焉』(1994；2004に英訳版発行)、『ナショナリズムとジェンダー』(1989；2009に英訳版発行)、『発情装置 ― エロスのシナリオ』(1998)、『差異の政治学』(2002)、『生き延びるための思想 ― ジェンダー平等の罠』(2009)、『女ぎらい』(2010)、『ケアの社会学―当事者主権の福祉社会へ』(2011)が含まれる。彼女は長年にわたりフェミニスト運動に携わり、現在は非営利団体であるウィメンズアクションネットワーク(http://wan.or.jp/)の代表を務めている。また彼女は「日本のフェミニズム40年」（http://worldwide-wan.blogspot.jp/）と銘打たれた講演で、これまでの40年間で日本の女性が得たものと失ったものについて総括しているので、こちらもご参照いただきたい。

社会学者」は名のるのに便利なことばである。社会学の名において、日々の活動を何でも、マンガを読むことからバスの乗客の会話を立ち聞きすることまで、社会学研究の主題と見なすことができる。社会学者として、わたしは自分が属する社会に対するふかい懐疑心をやしなってきた。この懐疑心は、もともとわたしの性向だったから社会学者になったのか、それとも社会学の訓練を受けたからこんな懐疑心が育ったのか、どちらかわからない。たったひとつ言えることは、社会学者としての態度は、わたしを世の中のまちがったこと、正気とは思えないこと、愚かなこと、へんだと思えることへと向かわせたということだ。こうした態度がわたしをジェンダー研究に向かわせたのは当然ともいえる。なぜならジェンダーまみれの世の中は、不条理、愚行、奇妙でリクツに合わないことがらに満ちていたからだ。若

>>

かったころ、こんなことばを標語にしていた。「今日の非常識は明日の常識！」多くの点で、わたしの予言はジェンダーに関する限り当たったと言える。

40年以上前、1970年代にわたしが大学生だったころ、学問の世界はまだ、女にとって居場所のない男社会だった。男子学生と女子学生は手をたずさえて学生運動にとびこんだが、その結果は女性にとって深刻な失望をもたらした。学生運動はしょせん「男の子のゲーム」で女のものではなかったからだ。男性同志たちは、保守的なオヤジと同じくらい性差別主義者だった。

学生運動が崩壊したあと、わたしは何の向学心もなく、現実の社会から逃避したいというモラトリアム動機だけから、大学院に進学した。そこでわたしはちょうどアメリカから紹介されつつあった女性学に出遭った。それはまことに眼からウロコの経験であり、わたしは自分自身を研究対象にしてよいということに気がついた。わたしは自分が何者であるかという問いと格闘しており、その問いの中核に女であることが関わっていた。幸運なことに、その当時そう考える女性はわたしだけでなかった。

わたしは自分が日本の女性学のパイオニアであることを誇りに思っている。というのも、わたしたちの前には、女性学は存在しなかったからである。わたしの世代の女性学の研究者はすべて独学である。わたしたちは研究会を組織し、互いに学びあい、雑誌を刊行し、読者を獲得しようとした。そのころできあいの社会学にうんざりしていたわたしは、はじめて自分がふかくコミットし、怒りの感情抜きには書けない研究テーマを、ジェンダーとセクシュアリティのなかにみつけたのだ。

日本の女性学は大学の外で生まれて育った。最初のころ、わたしたちは女性学で就職できるとは思わなかったし、研究費を獲得したり、権威のある学術誌に投稿できるとも思えなかった。それで自分たちの手ですべてをつくりださなければならなかった。女性学はまともな学術分野とは認められていなかった。が、10年経つと80年代には、わたしたちの女性学研究誌から学術誌の論文が引用を始めた。20年経つと90年代には、日本でもっともプレスティジのあると思われている東京大学から、わたしは「性と世代」を講ずるポストに招かれた。東大では、わたしのクラスの学生たちは、自由に「少女マンガの女性表象」とか「ゲイ＆レズビアン・コミュニティ」、「ウェブ上のシングルマザー・フォーラムの言説分析」、「マスターベーションの歴史」とかをテーマに選んだ。こうしたテーマで彼らは卒業論文も修士論文も、博士論文を書くこともできた。とはいえ、学界での彼らの将来が保証されているとはかぎらないが。

社会学は、わたしの女性学研究にとって役に立った。ポストコロニアル研究のガヤトリ・スピヴァクのことばを借りれば、「敵の武器をとって闘う」ようなものだった。わたしの代表作『家父長制と資本制』（1990）では、男性読者に、彼らの女性との関係に問題があることを説得的に示すことができた。ひとりの男性読者はこう言ったものだ。「あなたの本を読んで、女房が日頃こぼしていたことが何だったか、初めてわかりましたよ」。逆だろう、彼がまずやらなければならなかったことは、妻の言い分に耳を傾けることだったのに。だが、男性に彼ら自身の問題を理解してもらうには、覇権的な言語を用いるほかなかった。この状況は、学問の世界で生き延びるには英語を用いるほかないというポストコロニアルな状況と共通している。というのは、グローバリゼーションとは英語中心主義にほかならないからだ。したがって、わたしは英語と日本語、男ことばと女ことば、学問の用語と日常用語、標準語と地方語等々の「バイリンガル」になった。社会学者の位置はもともと「境界（あいだ）」にある。その点で、カール・マンハイムの「境界人」の理論は今でもあてはまる。

女性学は、学問の世界における女性運動の働きをした。だが、その女性学が制度化されると、次の問題が起きた。女性学の制度化にわたしたちは責任があるが、その功罪を問わねばならない。女性学の挑戦は、男性中心的な学問研究を変えることに貢献したか？それとも女性学は制度化をつうじて、従来の学問研究に適応を遂げたのか？この問いは、女性の軍隊参加と似ている。女性が参加すると軍隊は変わるか、それとも女性は参加を通じて軍事化されるか？どちらが先に進行するか？残念ながら、歴史は後者が先行することを示している。制度は異端をもとりこんでいくのだ。

わたしたちは今でも客観性、中立性、検証可能性、反証可能性のような科学的規準と闘っている。そもそも価値判断なくして、わたしたちはいかにして研究主題を見出すことができようか？価値へのコミットメントなしに、何かが間違っているとどうしてクレイム申し立てができるだろうか？未来の社会に対する期待なくして、労多くして功の少ないこのような研究活動を、どうして続けることができるだろうか？

退職の年齢を迎えて「名誉教授」になった今、わたしは社会学者でよかったとしみじみ思える。というのも社会学はすでにわたし自身の一部分だからだ。（上野千鶴子訳）■

> The Vocation of Sociology

Sociologist as Life Destiny

職業としての社会学――人生の定めとしての社会学者――

by Vladimir Yadov, Institute of Sociology, Russian Academy of Sciences and former ISA Vice-President, 1990-1994

Vladimir Yadov.

Vladimir Yadovはソビエト連邦における社会学の先駆者であった。その研究対象は「ブルジョア」科学としての不安定な存在であった。レーニグラード大学において、彼は1960年代に初めて社会学の研究所を創るうえで中心的な存在であった。そしてまた、Man and His Workという出版物だけでなく、新しい職業として定義された方法論的な最初のテキストを出版したのであった。彼は社会的行動としての自己規制に関する社会心理学の理論を発展させた。そして、the European Association of Experimental Social Psychologyの指導者に選ばれた。ポスト・ソビエト連邦において彼は、the Institute of Sociology at the Russian Academy of Sciencesの理事長になり、社会学に対するa multi-paradigmatic approachを展開した。長年、彼はロシア社会学の大使を勤める一方で、1990年から1994年の間は、国際社会学会の副理事長として活躍した。彼は保守主義の台頭に対立する形でロシアの社会学者による自由民主主義派のリーダーである。彼は多くの学生に愛され、ソビエト社会学の始まりから今日までを指導している。

私は1960年代初頭に社会学者となった。そして今日、私の人生の旅の結果を総括する時期である。私は自分の人生における幸運をとても感じている。長年、ソビエト連邦の公式メディアは社会学を「ブルジョア偽科学」とみなしていた。しかしながら、スターリン体制が1950年代後半に崩壊した後、ささやかな自由主義の時代があった。同僚や私はレーニングラード大学において社会学の研究所を創設しようとした。そして、同時に、社会学部――労働と余暇の新しい形に関する研究のためのセクション――が

>>

the Institute of Philosophy of the USSR Academy of Sciencesに設立された。それは社会学的な動きの始まりであった。しかし、社会学のすべての先駆者は、異なった教育的な背景をもち、学問外の学生として新しい専門を学ばなければならなかった。あるいは、私たちは今日、次のように言うことができるかもしれない。つまり、手に入れることが困難なテキスト（主に英語で書かれた）から隔たった、それゆえシガレットペーパー上にタイプされた翻訳によるカーボンコピーである「地下出版」によって広めなければならなかった学習者であったのだ、と。

ポーランド出身の社会学者との対話はは活気のあるものであった。「鉄のカーテン」の時代であったにもかかわらず、その対話を通して、社会学の専門性は学問領域として確固として確立されたのである。共同研究プロジェクトは、東ヨーロッパ諸国の間における協力体制の枠組みの中で実施された。私はJan　Szczepa⊠skiと密接なコミュニケーションを取るという幸運に恵まれた。その一方で、Zygmunt Baumanは理論的な側面において私を教育し、Stefan Nowakはフィールドリサーチのニュアンスを説明することに多くの時間を使ってくれたのであった。今日、私は、ロシア科学アカデミーの人文科学系大学の社会学部の学部長として、ワルシャワ大学の社会学部と密接なコラボレーションを続けている。そして、Krzysztof　Koselaは、彼のメンターであるStefan Nowakの伝統を受け継いでいる。今日、年配世代の間で培われた専門的な協力の習慣は次の世代に受け継がれている。

1958年、ソビエトの機関はソビエト社会学会を設立する許可を私たちに与えたが、それは厳しいイデオロギーの支配下にあった。その内規は、史的唯物論がマルクス社会学の基礎であることを明記した。学会を支配する政府は、学会メンバーに対して国際会議においてマルクス社会学の長所を促進せよと命じた。いずれにせよ、国際社会学会に出席した若手社会学者は、新たな専門家とのコンタクトを促進した。そして友好的な関係が、ソビエトの社会学者と他国の同僚との間で築かれたのである。

社会学は今日のロシアにおいて、一般的な大学のディスシプリンである。しかしながら（不幸なことに）、社会学者は専門的な連帯感は持ち合わせていない。社会学的なコミュニティは、いくつかの自律的な組織に分かれている。ポスト・ソビエトの「文化的トラウマ」の兆候の一つは、Piotr Sztompkaが指摘したように、ソビエト社会学とポスト・ソビエト社会学の評価の両極性である。Viktor　Vakhshtaynの論考の出版をめぐる論争は、この点に関する最善の実例である。[1]

社会の病理、例えば汚職、民族的な対立などは今日の最先端の研究課題である。しかし、方法論的なレベルは、学術的な研究プロジェクトにおいてさえ、悲劇的にソ連時代の主要な社会学者の全体水準を下回ったままである。その理由の一つは、低賃金の教職を得ることに消極的な有能な大卒者の不十分な流れがあったからである。一般的な市民の観点において、社会学者の専門的な職業は、「世論調査者」と結びついている。そして多くの人びとは、ジャーナリストと社会学者をひとまとめにしている。つまり、責任感のない人びと、例えば状況に適するためにデータを「調整する」能力を持つ人、あるいは、あらかじめ定められた答えとともに問題を定式化する能力を持つ人とひとまとめにしているのである。

あらゆる環境において、社会学者は専門的な知識と経験を下回らない市民としての責任を持たなければならない。私が学生たちと対話するとき、私は楽観主義者のままである。彼ら/彼女らのごく少数は社会へのサービスとしてこの職業を選択するけれども、近い将来、私は新しい世代が歴史の舞台に進み、社会学に対してわれわれの努力に値する専門的な形を与えることを期待している。（仲修平訳）■

[1] V. Vakhshtayn, "On the Lamentable State of Post-Soviet Sociology." (Global Dialogue 2.3); Zh. Toschenko and N. Romanovsky, "On the Real State of Sociology in Russia: Opposing Vakhshtayn's Polemics" (Global Dialogue 2.5); V. Vakhshtayn, "We have it all. But do we have anything?" (Global Express 8.20.2012).

> The Traveling Favela

ファヴェーラ旅行

by Bianca Freire-Medeiros, Getulio Vargas Foundation in Rio de Janeiro, Brazil

アーティスト2人組のJ. Koolhaas and D. UrhahnによるSanta Marta地区。このさいファヴェーラのこの再設計は居住者によって実行されたものであり、Santa Martaの「旅行者の注目」を集める美的干渉の好例となっている。写真：Bianca Freire-Medeiros

リオ・デジャネイロのファヴェーラ（スラム）ツアー、ケープタウンやソウェトのタウンシップ（黒人居住地域）ツアー、ムンバイ、マニラ、ジャガルタ、カイロ、ナイロビのスラムツアー。1990年代初期から――経済統合、新自由主義的な都市行政、メディア文化のグローバル化の加速という背景の中で――地球の南側にある大都市に位置する地域は、貨幣価値がプロモーターと消費者によって同意され、旅行商品となった。

リオデジャネイロの人口の20％はファヴェーラの居住者によって構成されている。およそ130万人が、都市化と生活の質が非常に異なるレベルにある約1000のコミュニティに住んでいる。国際的なイメージにおいて、ファヴェーラはカーニバルやサッカー、セクシーな女性と共に、ブラジルのステレオタイプ的なイメージの

>>

Santa Martaにて。この海外からの旅行者のカメラが、世界的に著名なブラジル人画家Romero Brittoによるキング・オブ・ポップに出会った瞬間。写真：Bianca Freire-Medeiros

一部となった。ブラジル人のイメージとして、膨大な参考書目で論証するように、ファヴェーラはさまざまなソーシャルアクターによって計画され、議論され、対処されている主要な問題――不平等、暴力、市民権――の広範囲で実質的な事実の中心となっている。この過程で、“ファヴェーラ旅行”は想像の空間であり流動的な実体であることが明らかである。グローバルな商品やトレードマークとして、世界中のレストラン、店舗、クラブをより面白く、興味を引くようにするために、シトロエンや日産車からIKEAの家具に至るまで、幅広い製品が広告キャンペーンで使われている。一方、観光地としては、消費の対象としての貧困を再表明する世界的な物語とその手口の一部となっている。すなわち、それは他方で、観光客の世界とは完全に正反対のものとして理想化される辺境の地域に専門職員に近い管理の元での直接的で安全な接触を約束する、いわゆるリアリティツアーの拡張の一部となっている。

ブラジルでは当局が、貧困エリアへの観光の熱烈な流れの存在をまず無視し、そしてしばしば公然と非難して、それを常に隠すことを要求してきた。同時にブラジルのエリートは、ファヴェーラ旅行は国のイメージを汚し、動物園のようなディスプレイの中に貧困層を閉じ込める卑劣な活動であると主張した。しかしながら、現在は、様々なソーシャルアクターや機関がFIFAワールドカップ（2014年）とオリンピック（2016年）を見越して都市のマーケティングと都市起業家精神の原則に従ってスラム街ツアーを再考案している。ほぼ15年前からの、２つの象徴的なイベントが、この重要な変更とそれが今日どのように統合されているかの意味を理解する手助けとなる。

> 1996年1月

マイケル・ジャクソンがスパイク・リ

>>

ー監督のミュージックビデオ："They Don't Care About Us"の撮影のためにブラジルを訪れた。リオデジャネイロの裕福な南区域にある、サンタマルタ・ファヴェーラは、ビデオのために選ばれた場所のうちの1つで、都市の貧困に対する当局とエリートの無関心を暴露することを目的とした。

サンタ・マルタの人口のほとんどがこの出来事を祝福したにもかかわらず、政府当局は憤りとともに反対した。ジャクソンに対して、その当時のリオデジャネイロの州知事、マルセロ・アレンカーは、財政的にファヴェーラを助けることによって、彼の善意を証明しようとした。かつてのサッカーのスーパースターであり、その後スポーツ省の大臣となったペレは、それがブラジルでの2004年オリンピック招致のチャンスを台無しにしたのかもしれないと主張した。

ロケーション代と撮影中の安全を提供するために50人の住民を雇うことをスパイク・リーとサンタマルタの麻薬王であるMarcinho VPとの間で交渉されていたということをリオデジャネイロの主要な新聞が主張したときに政治熱が上昇した。地方検事は、深刻な被害を観光産業に与えたと主張し、撮影の停止を要求した。リーは、ブラジルを公務員の間で傷ついた自尊心の感覚を悪化させる"バナナ共和国"と呼んだ。

> 2010年8月

サンタマルタ・スラム街は、リオトップツアープログラムの壮大な立ち上げのために、当時のルーラ大統領、リオデジャネイロ州知事のセルジオ•カブラル、そしてリオデジャネイロ市長のエドゥアルド•パエスを歓迎した。ブラジル観光省の支援を受けて、リオトップツアーは警察部隊の傘下（UPP、ポルトガルの頭字語からきている）の活動の一つとなっている。

ルーラ大統領は、住民自身を包括することがスラムの暴徒などを鎮圧し、観光潜在力を最大限に活用する方法であるとリオトップツアープログラムを発表した。さらに、彼らは旅行の可能性を実現するために政府の支援を有するであろう。皮肉なことに、そのイベントはマイケル•ジャクソンが彼のミュージックビデオを撮影し、現在はポップ界の王の銅像が建っている場所であり、不安定な掘っ立て小屋と海の美しい景色に加えて、サンタマルタの主要な観光名所となっているところで執り行われた。

> 2013年5月

私がこの記事を書くように、観光的なスラム街に必要な市場価値を生み出すプロセスはサンタマルタだけでなく、いくつかの「鎮圧された」スラム街の中で起こっている。このプロセスは、スラム内部からの重要なリーダーシップを含む、州、および市民団体一般によって支援される。政府の形態は、フーコー的にいうと、外部の強制を通してではなく、潜在的な観光起業家と見なされているスラム街居住者への自由および自治に帰することによって正確に機能している。

ボルタンスキーの表現をパラフレーズして言うと、観光名所としての特定のファヴェーラの価値は、現在、観光客に提供できるサービス力、ホストとしての居住者のパフォーマンス、そして一般的なスラム街に期待されること――すなわち貧困、いくつかのレベルにおける混乱、統制された暴力と陽気さなど――を届ける能力によって、評価される。 この論理に従えば、観光客もまた彼らの市場価値という点で評価される。つまり、 彼らの存在とチケットや土産物、飲料と食物などの様々な購入を通して、彼らは顧客としてみなされ、特定のファヴェーラの社会的・経済的発展に貢献するのである。

行政が退却していないということを我々がここで証言していないと認めることは、重要である。政府の承諾とともに、 ファヴェーラ旅行が実施され、そして世界中へと伝わっているにもかかわらず、鎮圧されたあるいは鎮圧されていないスラム街の実際の中の流動性パターンは、未だ合法的／非合法的な権力機構によって非常にコントロールされ、妨げられている。したがって、我々が見ているものとは、市場によってますますのみ込まれる領域を管理するための戦略、戦術と手続きの改良なのである。（大森美佐訳）■

[1] As in April 2013, 32 favelas were "pacified" in Rio de Janeiro following basically the same strategy: the government publicly announces an occupation before the BOPE (Special Force Unit) goes into a specific favela, giving criminals time to flee and avoiding any violent confrontation between them and the police.

> Behind the Garment Disaster in Bangladesh

バングラディッシュ縫製産業災害の背後

by Mallika Shakya, South Asian University, Delhi, India
シャキア・マリッカ（南アジア大学、インド・デリー）

バングラデシュのダッカ近郊都市Savarの縫製工場の瓦礫の中で発見された2名の犠牲者。写真：Taslima Akhter.

>>

2013年4月にバングラディッシュ・サバールで起こった縫製工場ビルの倒壊事故では、1100名を超える労働者が亡くなった。広範な非難の声があがった一方で、今回のような規模の災害を引き起こした搾取のシステムについては、ほとんど言及がなされていない。

縫製産業がもつ荒々しい歴史を知る人は、この産業では事故が起こりがちであることや、今回のバングラディッシュでの災害がアジアやアフリカのどこでも起こりうることを知っているだろう。にもかかわらず、バングラディッシュでラナ・ビルディングが崩れ落ちた時、労働者や労働組合の反応は緩慢なものだった。他方で、欧米の卸売業者や消費者から最も声高な反応がなされ、今回の災害に関する特定の解釈がかたちづくられた。

> 「オリエンタリスト」報道

ニューヨーク・タイムズが報じた「防げたはずのバングラディッシュの悲劇」という声明は、BBCやグローブ・アンド・メール、ロイター通信などによって繰り返し報じられたが、それは、今回の事態を第三世界における災難として、悪徳の業者や腐敗した政治家、機能しない官僚機構、自らを死に至らしめる以外の選択肢をもたない貧しい人びとに関わるものとした。こうしたオリエンタリストの視角は合理主義者の視角でもあり、富裕層の顧客に対し、工場の所有者を逮捕するか、多国籍からなる買い手に罰金をかけることで、問題は解決していくとした。

当初、メディアは、今回の災難をもたらしたビルの所有者であり、ビルは立ち入ったり働くことに問題なかったと発言したとされるソヘル・ラナ氏へと非難を集中させた。4日後には、死者数が400人にのぼり、小売り業のあるグループが、犠牲者に対して一定の賠償を行うとした。1週間後には700人の死者が確認され、EUは、EU市場に向けたバングラディッシュ衣料製品の輸出に対する免税資格を無効にすると警告した。1ヶ月後、死者は1100人にのぼり、バングラディッシュ政府は、縫製産業に対して労働組合の結成を認める法律修正を行った。その直後には、米国が、産業競争力の前提条件としてフレキシブルな労働を推奨してきた世界銀行による指標Doing Businessの正当性を疑問に付した。

労働者の組織化は、縫製産業災害の核心部分である。ラナ・プラザの労働者たちは、建物の壁にひびが入り、他のすべての事業が退避した後でも、就業を継続することを強いられたために亡くなった。縫製産業の労働者たちは、工場主に対抗するための労働組合をもたなかった。近代民主国家で350万人が従事する産業において、この産業を支配しているグローバルかつローカルな資本家だけでなく、それを統制している開発の実践主体たちをも有効に批判することができないままである。国際援助機関は、第三世界の産業化においては覇権的な存在感を持ち続けており、労働者を不可視化することに加担してきた。すなわち、世界銀行のDoing Business指標やILOによる雇用契約の国際規約の枠組みは、労働者の生産性と安全性は、それが資本家の手中にありその管理下にあることによって高められると説いてきたのだった。この教義が覇権を握ってきたために、バングラディッシュのみならずアジアやアフリカ各地において、労働者自身の組織化は後回しにされてきた。労働を脱政治化していく理論的な根拠は、産業化を単なる市場における需要と供給へと還元する理解と、人びとを事業主体化させていく舞台を用意する複雑なポリティカル・エコノミーからの脱埋め込みとに由来する。

> 多国間繊維取引協定（MFA）

今や「市場」は、地球上を広くその毒牙にかけているが、しかし「市場」のみが縫製産業の災害に責任があると考えるのは正しくない。縫製産業のもつ労働集約型の性質は、移民労働者を引き寄せ、その後に次々と移動する作業現場をかたちづくることとなった。19世紀における米国のスエットショップは、20世紀にはいって縫製労働が東アジアへと急激に移転するまで、東欧ユダヤ系の移民労働者によって担われていた。だが、最近のグローバルな縫製産業の分布は、米国政府によって周到につくられた複雑な貿易機構によるものであり、それ

多国間繊維取引協定後、縫製産業の貿易パターン は、さらに同産業が不安定なパターンになるとともに激化する競争の元で再編成されることとなった。

>>

によって今日の繊維のグローバルな製造が操作されているのである。

1974年に締結された多国間繊維取引協定（MFA）は、あらゆる品目やデザインにおよぶきわめて詳細なものであり、第三世界の各国が何種類の衣服を米国に輸出するかを記している。1974年から2004年までの間に世界中で輸出された衣服は、米国に陸揚げされる前に、個別の査証を得なければならなかった。米国の戦略的な利害のもと、中国のような潜在的なライバル国に対しては低い「割当て」がなされる一方で、バングラディッシュやレソトのような小さな国に対しては高く割当てられた。したがって、1970年代初めにはほとんど存在しなかったバングラディッシュの縫製産業が、わずか数十年のあいだに350万人の労働者が従事する産業へと急激に拡大したことも何ら不思議なことではない。

MFAは、当初は一時的なものと考えられていたが、その後1977年、1981年、1986年、そして1994年にわたり4度延長され、陣地が固められ、その永続が目論まれた。しかしながら、世界貿易機構（WTO）が1995年に設立され、MFAは2004年12月までに撤廃することが決定する。MFAの撤廃は、グローバルな縫製産業をその根本から転換させ、ネパールやインドネシアにおける縫製産業は事実上衰退し、中国やバングラディッシュがポストMFA競争における勝者として現れた。このことは、最低の賃金、保護なき労働条件、そして雇用者側による労働の安全規制への要求を、産業競争のためには必要悪だとする、新自由主義的な開発を下支えしたのである。

新自由主義的な「必要悪」の推進と結びついたMFAの短期的な視野というものが、なぜバングラディッシュのほとんどの工場施設が、政府機関が求める基準を満たすことなく、でたらめにつくられているのかを説明する。ラナ複合施設やその他の何百もの建設許可を出した町長は、なぜそうしたのかといえば、この任務を実施する権限をもった国家機関であるダッカ建設安全局が、単にこの時、バングラディッシュの縫製産業の爆発的な拡大に追いつけていなかったためである。こうした状況のもとで、前例のない規模での衝撃的な今回の事故を、ひとえに生産主や幾人かの限られた買い手たちに起因させ、より大きな諸権力のあり方をそのままにすることは、アパルトヘイトの体制には目を背けつつ人種差別主義者を非難するようなものである。バングラディッシュにおける政治・社会的な調和を乱す、社会的激変の引き金となった今回の危機は、グローバルな貿易機構の失敗と、その開発に対応したラナ複合施設とジョー・フレッシュに対する無関心によるものなのである。（岩舘豊訳）■

> Your Paper Has Just Been Outsourced

あなたの論文は外注されていた

by Jeffrey J. Sallaz, University of Arizona, USA
ジェフリー・サラ(アメリカ・アリゾナ大学)

フィリピンでのアウトソーシング事業の様子。

多くの科学者がそうであるように、私もまた、ある社会学のジャーナルへの論文の掲載が許可された後に、その論文に何が起きているのかについて、長らくあいまいな考えしかもっていなかった。出版ということであれば、ジャーナルの編集者が近くのオフィスで仕事をする経験豊かなコピー・エディターに私の原稿を手渡しするものだと思っていた。何十年もの間、媒体としての物理的な制約から、つまりは、論文の原稿にはかさがあり、そのため長距離を自由に素早く輸送することが難しいため、実際にそうなっていたのである。すなわ

>>

ち、学術出版プロセスの空間的な集中である。ジャーナル編集部、編集スタッフ、印刷所は通常、同じ地域、同じ都市、場合によっては同じビルの中にあって、公私に渡るさまざまなつながりによって互いに結びついていた。

しかし、こうしたモデルは今やますます本流ではなくなりつつある。私は、ここ数年に渡って東南アジアの「知的業務委託（KPO）」産業について調査する中で、グローバル・ノースにある出版社に対してサービスを提供することに特化したいくつかの会社の内部でフィールドワークを行った。そこでは、軍隊のような大量の若者たちが長時間に渡る労働に対して最低限の賃金で雇われ、コピー・エディター、タイプセッター、電子化の専門家などの仕事をしていた。さながら、グローバル・サウスのどこにでも見られるような、外国企業の巨大な組み立て工場のようである。

> 出版する怪物たち

知的業務委託企業［の代表格］が新興の知識サプライチェーンにおけるフォックスコン社だとするならば、誰がアップルなのか。この疑問に答えるためには、科学出版の領域において起こっているある転換を参照するのがよいだろう。私たちが今日目にしているものは、大学の学部の中に収蔵されていた小さな出版物からなる分散的なネットワークというよりはむしろ、最近のChronicle of Higher Education誌の論説にあったように、手で数えることができるほどの「出版する怪物たち」である。

それらは巨大な上場企業で、学術ジャーナルの所有権を精力的に獲得してきた。人文学のような「ソフト」な領域のジャーナルと同じく、社会学のジャーナルは今のところこうした権利獲得のターゲットにはなっていないが、「ハード」な科学のジャーナルでは事情がかなり違っている。ハード科学の分野のジャーナルは収益機関として作動するグローバルな出版コングロマリットの手にますます握られるようになってきている。

そうした「怪物」としてもっとも悪名高い例がエルゼビア社である。アムステルダムに本拠地をおくこの出版社はより大きなリード・エルゼビア・グループによって所有されている。リード・エルゼビア・グループはロンドン証券取引所を始めとして、いくつもの証券取引所に名を連ねる。エコノミスト誌によれば、エルゼビア社は2000誌を超えるアカデミック・ジャーナルを所有し、医学、科学技術関連領域のすべての出版物のうち25％を管理している。また、2012年の利益率は40％だとされる。

現在は、エルゼビア社が個人や機関に対して課するジャーナルへのアクセス料金があまりに法外だとして、多くの科学者がエルゼビア社が所有するジャーナルをボイコットしている。しかし、エルゼビア社とその同業者によって作られたビジネスモデルは科学的発見の「普及」を超えた領域にまでその手を伸ばし始めている。学術的な仕事を生産するすべてのプロセスに浸透しつつあるのだ。

> サプライチェーンを組織する

今や出版社は、科学者自身が自らの研究や、同僚と協同する際に使っていた多くの新しいテクノロジーを活用している。電子メール、FTP、ワープロ、クラウド・データベースといったものはすべて、出版プロセスのさまざまな要素を集合配置してきた長らく続いた常識を旧時代のものにしている。著者がジャーナルの編集者にワード文書を電子メールで瞬時にかつ無料で送ることができるのとまったく同じく、ジャーナル側はこの文書を世界のどこかにある下請け業者に転送することができる。

エルゼビア社のような新しい科学出版コングロマリットは下請け業者のネットワークを築き上げることでこのビジネスチャンスをものにした。コングロマリットはますます大きくなる出版サービスの各系列に外注する。下請け業者は１年か２年のサービス契約をめぐって競争し、許容できる水準の質をもっとも低い価格で約束することで契約を勝ち取ろうとする。その結果、工場やコールセンターで今や「大流行」している、サプライチェーンのありとあらゆる管理技術が出版プロセスにも適用されることとなる。仕事内容は脱熟練化され、徹底的な自動化が追求され、従業員は生産性向上を求められ続ける。さもなければ、雇い止めや配置換えにあうだろう。

この後に続く私の報告を読めば、こうした知的業務委託を請け負っている業者の内部で起こっている複雑な生産プロセスのイメージが得られるだろう。ジャーナルへの掲載許可が得られたあなたの次の論文は、この外注モデルを動かすことになる。グローバル・サウスにおいてこのモデルの最前線に置かれている40～50人の従業員のデスクトップコンピュータの間をあなたの原稿は行き来するだろう。原稿にさまざまな加工をするにあたって支払われる賃金は、時給にしておよそ0.5米ドルである。

たとえば、１年以上に渡って私がフィールドワークをしたある企業では、次のような生産プロセスがとられていた。論文の掲載を許可された著者はワード文書の形の最終原稿をジャーナル編集部に電子メールで送る。編集部はその原稿をFTP経由でフィリピンのデータ倉庫に送付する。そこでは、何人もの「プレ・エディター」や「ドキュメント・プロセッサー」が余白を調整したり、参考文献のフォーマットを整えたり、XMLタグを挿入したりする。その後、インドにある自社工場のひとつに送られ、コピー・エディティングの集中講座を受けた大学新卒者が論文を速読し、明らかなタイプ上のミスや文法ミスを修正する。そしてフィリピンに送り戻されて、タイプセッターがその雑誌のテンプレートに合わせたPDFに変換した後で、さらにインドに送って、品質管理チームがPDF上でエラー検査をする。

この時点までは、原稿に対して仕事をしていた者はすべて基本的に英語能力を備えた者たちである。しかし、最後のPDFが送られるベトナムでは、フィリピンやインドのカウンターパートとコネクションをもっているが、英語は話せない人たちが雇われている。そこですべてのファイルが再度検査され、スペーシングや余白をページごとにチェックし、PDFに残された汚れがあればそれを取り除くといったごく初歩的な仕事がなされる。しかし、ここにおいても工程は終わりではない。ファイルはフィリピンに戻され、まったく新しい生産ラインがさまざまな原稿を集めて、プリント版ジ

>>

ャーナルと電子版ジャーナルの最終ヴァージョンにまとめ上げる。最初から最後までを通して、すべての工程が１～２週間を超えることはまずない。

>フォックスコン化する科学

社会的な正義の基本原則にコミットする社会科学者として、科学的な営みの鍵となる部分をこうして外注することに対してわれわれはどう応えるべきだろうか。簡単な答えなどない。既存の労働者の職を守るためだけにジャーナルの外注へのボイコットを呼びかけることは、伏在する保護主義嫌いの罠にはまるだけだろう。インド人やフィリピン人のコピー・エディターがアメリカ人やカナダ人と同じくらい仕事ができるのなら、なぜそうすることを妨げられなくてはならないのか。

他方で、われわれの論文の品質がこのシステムによって体系的に歪められているということであれば、そのような方法で行動することも正当化されよう。しかし、時おり現れる根拠のない話を別にすれば、外注モデルは多くの点において善をもたらしているようにも見える。前回のISA大会においても、アップルのアジアにおけるサプライチェーンの節操のない管理方法に反対の意を示すものが一定数いたにも拘わらず、MacBookやiPhoneが視界から消えることなどなかったように、われわれは科学のフォックスコン化[1]を黙認しようとしているのではないか。もしそれが、われわれの論文がこれまで以上に短期間で掲載され、紙媒体のジャーナルからオンライン・エディション、Eブックなどへと、ますます幅広いプラットフォームに広がり、品質の低下もごく最小限ですむということであるならば。

ただし、少なくとも、掲載が許可されたあとで論文や原稿に何が起きているのかに対して、より大きな透明性を要求することにはなるだろう。出版社は過去10年間に築き上げてきた精巧なサプライチェーンのかなりの部分を著者から見えにくくしてきた。たとえば、出版社はコピー・エディターが著者と連絡を取る際に、国籍や所在地を明らかにすることを認めていない。しかし、こうしたことは多くの製造産業やサービス産業で標準的なこととされているものでもある。アメリカの自動車会社は個々の自動車部品についてアメリカ国内と国外で製造された比率を報告しているが、アップルは「Designed in Cupertino, Assembled in China」という免責事項を自ら個々の製品にプリントするだけである。学術出版の企業体とも言えるこの新種には、ケーキを持たせて大食いさせるべきではない。もしそうした企業体がグローバルなサプライチェーンを利用して、生産ラインの価格を下げながら、同時に製品の価格を今まで以上につり上げようとするのならば、生産者であり同時に消費者でもあるというこの特異な産業／領域にあるわれわれ科学者には、われわれの最初のひらめきを輝かしい論文へとしつらえる労働者たちの生活と労働条件に関して知らされるべき資格がある。（池田和弘訳）■

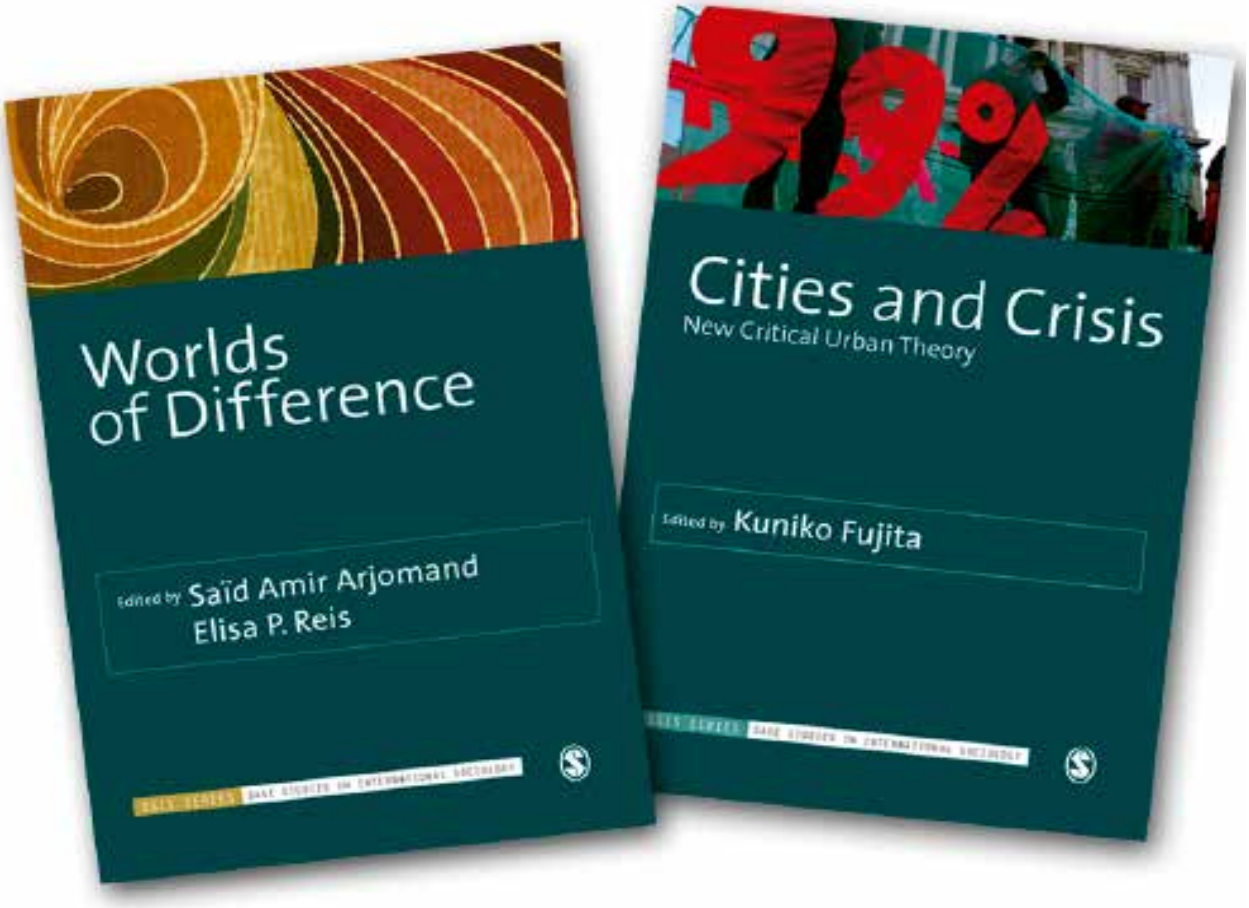
[1] フォックスコン（Foxconn）はアップル製品を数多く組み立てている台湾籍の企業で、2010年に中国の組み立て工場において自殺者が多発したことで悪評高い

> Cheaper Books

for ISA Members

ISA会員に安価な書籍を

by Sujata Patel, University of Hyderabad, India, and Editor of *Sage Studies in International Sociology*
Sujata Patel（ハイデラバード大学、インドおよび『*Sage Studies in International Sociology*』誌編集者



インドで製版されSSIS Seriesとして安価に出版される最初の2冊。

今後、『Sage Studies in International Sociology（SSIS）』のタイトルのもとで出版されるすべての書籍を、以前の価格のほぼ10分の1にあたる9.99ポンドで利用できるようになるというお知らせは、きっとISA会員諸氏の

>>

満足いくものとなるでしょう。そのうえ、この価格は郵送料込の価格です。 私たちはこの新価格で、Said Arjomand & Elisa Reis編『Worlds of Difference』と、Kuniko Fujita編『New Critical Urban Theory』の2冊の新刊を刊行開始します。 インド在住のISA会員は、Sageインド社から、それぞれ750ルピーでこれらの新刊にアクセスすることができます。（2013年8月刊行： http://www.isa-sociology.org/publ/isa_handbooks.htm）

さらに私たちは、『Key Texts of World Sociology』という新たなリスト作成も開始しています。ISAによるこのプロジェクトは、大西洋圏以外の世界各地で影響力のある社会学の諸テキストの出版を促進するものです。これらのテキストには、世界の各地域それぞれの最も影響力のある社会学が集まっています。現在、我々は以下の順番でこれらの『Key Texts』を出版していく予定です。

(1)東アジア（中国、日本、韓国、台湾）、(2)ラテンアメリカ、(3)中欧・東欧諸国（ブルガリア、チェコ、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、スロバキア）、(4)アフリカ、(5)アラブ諸国

SSISは、ISAの刊行シリーズの中で最も古い出版物のひとつです。当初は『Transactions of the World Congress of Sociology』というタイトルで、1949年の第1回世界社会学会議から刊行されていましたが、1974年からはISAによる『SSIS』として、新たな出版形態を与えられることになりました。それ以来SSISは、世界社会学会議の論文集、リサーチコミッティとナショナルアソシエーション会議の会議録や、他の重要な書籍とともに刊行され続けました。単著もしくは編著として出版されたもの、また、モノグラフやハンドブック、参考文献として利用可能になったものを合わせ、冊数として60冊を超えるこれらの書籍は、さまざまな専門分野の議論を引き出すことによって、学問への大きな貢献を果たしました。

しかし、SSISの重要性が広く知られ認められていたにも関わらず、これまでのSSISシリーズ書籍の売上高は低いものでした。SSISシリーズ書籍は、80～90ポンドという高い定価がついていたために、北半球諸国においてさえ、所蔵するのは図書館に限られていました。南半球諸国においては、図書館ですらSSISシリーズ書籍を見かけることがありませんでした。

そこでこの3年間、私は ISAの出版委員会、副会長、会長からの積極的な協力を得て、SSISシリーズ書籍の出版元であるロンドンのSage Publications社に出向き、書籍に非常に安い値段（約10ポンド）を設定するよう説得を試みました。

しかし残念なことに、我々は困難な問題に出くわしました。国際的な出版物（北半球諸国で刊行される書籍）と、南半球諸国で印刷される地域的な出版物の分類の違いです。北半球諸国から出版される本は、全世界の消費者の向けに市場に出荷され、国際的な値段で売られていきます。その一方、インドやその他の発展途上国で出版される書籍は、それぞれの地域向けの市場に出荷され、それに応じて価格を決定されます。 発展途上国にオフィスをもつすべての国際的出版会社（例えばSage、Oxford、Routledgeなど）は、このような差異のある価格構造にのっとった貿易協定を、途上国の支社と締結していたのです。

しかし、それらの困難な問題も対処可能になりました。我々はSage社を説得して、SSIS書籍シリーズの版元をSageのインド支社へ移転し、ISAの会員全員が今後すべての出版物について、大きな割引価格を利用可能になることの確約を得ることができました。 我々は、インドで（ISA非会員にも）――他の南半球諸国では国際価格並みで販売されているところを――インド価格での販売を行っていきます。

世界的な出版事業の不公平を打破するための第一歩を踏み出すことを確実とする、この先駆的な取組を支持してくれたSage社に、深い感謝の意を表します。この新しい政策を成功とするためにも、ISA会員の皆様には、ぜひこの機会を利用していただきますよう、お願いいたします。あなたの未来の出版物のために、SSIS書籍シリーズの購入を検討してください。（姫野宏輔訳）■

> Caught between Two Socialisms

2つの社会主義の狭間で

by Mariya Ivancheva, Central European University, Budapest, Hungary
マリヤ・イヴァンチェヴァ（中央ヨーロッパ大学、ハンガリー・ブタペスト）

Misión Ribas は多数ある社会的公正プログラムのひとつであり、ボリバリアン・ミッションとも呼ばれるが、ウゴ・チャベス大統領政権下で導入されたものである。これは高等学校中退者に高等学校レベルの補習的な授業を提供するものである。

2004年、ロンドンの大学に通っていた頃、ベネズエラとの結束のためのボリバリアン教育改革に焦点を絞った会議に出席した。客員教員であり、教育者であるオスカー・ネグリンは「ベネズエラでは子どもに抽象的な用語を覚えさせず、まず、'母'、'平和'、'チャベス'という最も重要な言葉を覚えさせる。」と述べ会議を進行した。それを聞いたとき、社会主義国家時代のブルガリアで過ごした幼少期のある思い出が蘇り、私の胸の鼓動は早くなった。

学級コンサートのリハーサルをおこなっているとき、担当教員であるトネバ同志が私に、母の手を握り詩を朗読するようにと言った。――「党のヒロインこそが世界で一番の母親です」。私は、それが誰なのかは知らなかった。私が唯一知っていたことは、私の母が世界で一番の母親であることであった。そのことを教員に伝えると、緊張と沈黙がそこに広がり、教員は私に渡した詩を他のものと取り換えた。そして1年後の1989年に、この教員は、「同志」という名称は忘れて「先生」と呼ぶようにと私たちに言った。ロンドンでの話に戻る。私が集会場を後にしたとき、ネグリンとその聴衆は1988年の学級の子どもの背中を、飛び跳ねていたあの少女の背中を見ただろう――民主化運動が始まって間もない頃、「飛び跳ねない人間は赤である」という当時よく使われた決まり文句があったためである。

ベネズエラ結束のための会議から立ち去る時、私の心中では、私の家族とブルガリアの学界の考えでもある反共産主義の考えに沿ってきたことへの満足感と共産主義の終わりへの審判とを、未熟な考えでもしくは肯定的に捉え過ぎたままに、下してしまったのではないかという2つの気持ちが衝突していた。ベネズエラの高等教育改革について1年半フィールドワークを続けた今、私は自分の満足感がいかに浅薄なものだったか、私の危惧がいかにもっともなことだったかを理解している。

私がこのトピックに辿りついたのは、反社会主義観念へのキュアとしてではない。社会主義から自由民主主義へのレジーム転換の余波が残

>>

る中、反社会主義だった有識者たちによって創設された大学（東ヨーロッパ）と逆に社会主義へ転換した後に創立された大学（ベネズエラ）の２つの大学の奇妙なコントラストに感興をそそられたのである。

私が博士論文のための研究を行っていた中央ヨーロッパ大学（CEU）は、1991にジョージ・ソロスという東ヨーロッパ系の西洋的自由民主主義の有識者である億万長者によって創立された。英語を基盤とした私立の大学院であり、現地の伝統的思考を持った有識者がファシスト・民族国家主義、もしくは全体主義・共産主義的であることを示した。この大学はターゲット層である学生を、西洋的自由民主主義とアングロ‐アメリカンサイエンスの中での「普遍的」な価値観のもと「新しいポスト社会主義エリート」として教育した。

対照的に、ボリバリアン大学ベネズエラ（UBV）――私の博士論文の主題――はウゴ・チャベス大統領と社会主義派の有識者たちによってデザインされた。この大学はチャベス率いるボリバリアンレジームに対するクーデターが企てられた後、そして高い技術を持った石油業関係従業者のストライクが起きた後の2003年に発足した。

アメリカ、ペンタゴンの財政支援のもと勃発したこれら２つの出来事は、チャベスの石油収入の再分配政策がアメリカびいきの、金利生活者経済労働を独占する知識を持つベネズエラのエリートにとって、耐えがたいものであったことを物語っている。

この支配に立ち向かうべく、ミッション・スクレ（Misión Sucre）が高等教育政策の一部として、UBVを通じてベネズエラの150万人の生活困窮者に対して高等教育を受ける公平な機会を提供した。この取り組みには、底辺に追い込まれたコミュニティの利益のために、現地の状況に基づいたインターディシプナリーかつ応用的なパブリック・サイエンスの価値観が影響している。

私はブルガリア出身者であり、CEU出身者であることから、権威に対し疑いかかる傾向が強いという自覚を持ったうえで、カラカスに向かった。その不安はUBVで聞いた最初の公開講座にて、CEUが「ファシスト」の教育機関であり、「CIAのスパイ育成」をしていると公言された時に、正当化されることとなった。

しかしながら、ベネズエラは「全体主義レジーム」ではないことや、私がスパイの対象ではないことに気付くのに、1か月はかからなかった。私は自由な選挙がおこなわれ、民間メディアが民主的に選ばれた政府を公然と盛んに罵るような国に来ていたのだった。

私への情報提供者――社会主義派の有識者であり、「自由民主主義運動」（1958-1998）が起きた時代にベネズエラの学生運動のメンバー――であった反エリート主義レトリックと包括的で教育的な実践を目の前にして、自分自身が持つ偏見の根源に気づくこととなった。

私はブルガリと東ヨーロッパのポスト社会主義学協会の産物であり、エリート主義的でエリート階級気取りだった。それは、西洋の価値観を批判することもなく受け入れていたということでもある。社会学者を含むブルガリアの知識人たちは、学界を、永久的な偉業の中で「古臭い国」の「野蛮」な同胞たちの恥を共に経験し非難することの出来る安全な天国だと思っている。各々の高等教育では、「良い生徒」対「悪い生徒」といった評価基準を隠すこともなく擁護するようなカリキュラムを基盤にしている。学生たちは当然ながら、こういった評価基準よって生まれる学級内の不平等さに対して、一人で立ち向かわされる。西洋の基準、論文引用数、大学のランキングにあわせるという決定は、自由市場に奉仕しなければ「イデオロギー的」であるというスティグマをかぶせるような「客観的」サイエンスの強調と抱き合わせとなっている。

私はUBVの理念を受け入れつつも、その問題とそれに伴う矛盾を感じた。「歴史の最後」――自由民主主義の社会主義に対する最終的な勝利――が1989年に東欧で宣言されにも関わらず、ベネズエラの学界における冷戦状態は終わりを見せていなかった。チリが1973年に経験した歴史的出来事や、アメリカ政府のキューバへ対する通商停止、ベネズエラで新たなクーデターが勃発することへの脅威により、ベネズエラ政府はさらなる改革にむけた圧政を遂行することができなかった。

大学教育もひどく影響された。ベネズエラの学生が20世紀を通して血を流し、戦い守った学校自治が、今度は皮肉なことに、彼らの敵対者によって利用されたのだった。古くからある国立大学における改革への反発と新しい「ボリバリアン」を否認することで、保守的な学者たちは以前より存在していた階層をさらに再構築させることに加担した。予算の決定や認定権は行政によって握られており、決定権を持つ多くの人が保守派である。低所得者への学びの場の提供の需要が伸びることにより、政府は多くのUBV教員と附属施設に学部卒業レベルの人材を就任させる事態に追い込まれた。プログラムが評価されるために、UBVの教員の信頼度を「アップグレード」することへのニーズと大学を根深い社会変革のツールとして使うことへのニーズが存在することによって、ダブルスタンダードが生まれた。ボリバリアンの学者たちは、伝統的な学問分野で使われる専門用語と低所得層コミュニティの文化的な規則への対応方法の双方を熟練しなければならなかった。彼らは、学術的優秀性を目指しながらも、それらを自らの土俵で叩き壊していかなければならないのである。

かつての社会主義の世界から来た人間として、21世紀の社会主義の現状に目を向けるに至るまで、非常に努力を要した。そして私は今、新しい問題に直面している。ベネズエラの制度の矛盾点を説明しようとすると、私はよく極左の西の学者からは右翼と言われ、ラテン・アメリカの社会主義の明るい面だけ信じ「ピンク・タイド」を見たがる人には「シンパ」と呼ばれる。ブルガリアでは、私がベネズエラを「全体主義」だと宣言しない事実によって、学会誌への投稿論文が「パルチザン」であるとされ、却下される。ありがたいことに、私の周りのCEUの教員や同僚は学術的な冷戦について熟知してくれている。そして、ひとつ依然として確かなことは、ロンドンの集会場を出た私には、まだ長い道のりが待っているということだ。（加瀬希和子）■

> Tall Tales from Sofia's Streets

ソフィアの街角で聞いた法螺話

by Martin Petrov, Sofia University, Bulgaria
Martin Petrov（ソフィア大学、ブルガリア）

ソフィアで落ちぶれて――真の「放浪する芸術家（cloch-art）』」――

財産もなく、空のビール瓶を返却する仕事さえできないまま、資本の生産に携わることができない人々がいる。 彼らは公共の空間に居住し、薬局で買った医療用アルコールを、ゴミ箱から拾い上げたビンに入れた公園の噴水の水で割って飲んでいる。その様子はさながら、国立劇場前の公園の一部をかじりとって作られたシックなオープンテラスのバーのようだ。 それでも彼らは、資本によって生み出される象徴的な秩序と無関係であるわけではない。むしろ逆に、 彼らは資本に対して非常に敏感であるがゆえに、それを自分自身に刻み込んでうまく同一化するための戦略を編み出しているといえる。彼らは放浪者、「ソフィアのさまよえる知識人」である。

私は哲学の学生であった頃、E氏に会った。彼は芸術関係のアカデミーでヌードモデルとして働いており、モデルの仕事をしていない時は、ソフィア大学でぶらぶらしていた。私と同じ専

>>

攻の友人は、彼のためにヘロインを都合してやり、彼も友人に同じことをしていた。父がイタリア系ユダヤ人、母がフランス系ユダヤ人であったために、E氏の名前はブルガリアではたいへん珍しいものだった。

彼の父は、1990年にブルガリア富裕層から「指名された」といわれるルカノフ前首相の片腕的な存在であり、社会主義国家の諜報部に所属して共産党の政党資金の分配に携わっていた。そのため、ルカノフが1996年に暗殺された後、E氏の父は国から姿を消し、その後の消息を知る者は誰もいなかった。E氏の母は、上述の諜報部の会計士として働いていたが、1990年以後はオカルト（註1）に興味を持つようになり、『Man, Spirit, Cosmos: Energy-informational Exchange』というタイトルの本を出版した。その後、彼女はネパールの修道院に入り、その後の消息は不明である。

これらの物語すべてが真実であるとは言えないが、真実ではないとも断言できない。これらは、ここ数十年の間にブルガリアで本当に起こったエキゾチックな出来事のコレクションである。 E氏自身の人生の物語も同様である。ノーメンクラトゥーラ（社会主義者のエリート階層）の子供として、彼は1989年以前はワイマールの芸術ハイスクールで学ぶ。しかし1990年になると、彼はマグラで生活するようになる。マグラとは、多くの「にわか成金」が元手となる資金を稼ぐために、ドルとドイツマルクを違法にやりとりしていたことで有名なソフィアの街の一画である。そこで彼は、ボールがどのカップの下にあるか賭けたり、観客が何のカードを考えていたかを的中させるギャンブルをやっていた。それから彼は、ソフィアのドラマアカデミーで演劇をすることをやめ、アルコールと麻薬のために劇場での仕事も失い、サーカスのアクロバット中に空中ぶらんこから落ちたのだという。

二年前、私は彼と再会した。彼は失業中であったが、ヘロインを止めて、屋根裏でうずくまっていた。 彼は、公園で詩を暗唱するパフォーマンスで、アルコールとタバコを買うために必要な日銭を稼いでいた。 彼はまだ、自分がいかにして彼の父親のメルセデスを壊してしまったかという物語を語っていた。それからまもなく、彼はその屋根裏部屋からも追い出されてしまった。私はまた、国立劇場前の小さな公園で、ビールか薬局の医療用アルコールを飲んでいる彼の友人や、社会的なはみ出し者たちに会った。その時最初に私の心をうったことは、「物語」を語るのがE氏だけではない、ということである。彼らは誰でも、何らかのエキゾチックな特徴づけをして自己呈示し、それについて物語るのである。

1人は、スラブの言語と文化を調査することに興味があるというロシア人であった。2人目はアルメニア人で、3人目は粗末なカウボーイブーツとクロコダイル・ダンディーの羽根つき帽子を身にまとったカウボーイであった。これらのエキゾチックな異国風の彼らのアイデンティティは、ソフィア中心部の公園や街路でわずかな金銭と隠れ家を探す彼らの日常的な現実から、明らかに遠く乖離し、異なっているものである。しかしこのアイデンティティが、社会的に認知される彼らのアイデンティティや平均余命といったものの喪失を補償するのに役立っているのである。

しかしまた、このグループの誰もが、最近よりも楽しい時代のことを思い出していた。ある者は2人の息子と一緒に妻から追い出され、またある者は大学を卒業したものの仕事を続けることができなかった。 彼らの多くは高等教育を受けている。 そして親類や友人のおかげで、あるいは首都で過ごした文化的な前半生のおかげで、集まって騒ぐことが好きなおしゃれ好きのソフィアの若者たちが公園に置き捨てていくガラスビンを集めて回る身をかがめた人々ほどには、絶望的な状態におかれることがなかった。そうして自己をエキゾチックなものにする戦略も、そうした戦略を持たない者や自分にだけ話す者などのより不幸な者とは区別して、自分を位置付けている。 E氏の好む言い回しを借りれば、「僕は『浮浪者（clochard）』ではないよ。『放浪する芸術家（cloch-art）』さ」ということである。

彼らは全員が友人であるかのようだった。だが、私が彼らのうち誰かと二人きりになると、その人は「他の人々がどんな恐ろしい人であったか」を語り始める。Xはビールを飲むと豹変して逃げ出した、Yはまだ薬漬けのままだ、Zは恐ろしく不細工な女と寝ていた、等々。生存すること、認知されること、そして平均余命に対する基本的な手段を剥奪された彼ら「ソフィアの彷徨える人々」は、自己尊厳に対する例外的で痛切なニーズと例外的に痛みを伴う必要を感じており、ごくわずかな想像力と悪意を除いては、例えば浪費行動のような他の手段でもってそれを処理することもしていないのである。（姫野宏輔訳） ■

[1]社会主義体制崩壊後の数年間、オカルトは流行の話題であった。ブルガリア語の論文だが、マーティン・ベトロフの『The Discourse of the Supernatural in Bulgaria of the early 1990s』（Sociological Problems 2010 1-2: 268-283）を参照されたい。

> Bulgaria's Postcommunist Debate about the Holocaust

ブルガリアのポスト共産主義者によるホロコーストをめぐる論争

by Georgi Medarov, Sofia University, Bulgaria
Georgi Medarov　（ソフィア大学、ブルガリア）

ベオグラードのユダヤ人歴史博物館所蔵の写真。1943年3月、ブルガリア占領下のスコピエ（マケドニア）からドイツの死のキャンプへと輸送されるユダヤ人を監督しているブリガリア人警官たち。

モリス・アルヴァックスの仕事から知られているように、社会的記憶は集合的アイデンティティ形成と本質的につながっている。1989年以降、第二次世界大戦中のブルガリアのユダヤ系住民をめぐり熱く繰り広げられた公的な討論は、過去が現在の政治を形作る方法の多くをわれわれに伝える。1990年代、ホロコーストは政治的主観を鋳造する主な象徴的資源となった。すなわち、（ホロコーストのとらえ方によって）以前の共産主義者と新しい反共産主義の特徴がわかるのである。両派ともに将来的なヨーロッパの統合、ネオ自由主義、民主主義等の共通したポスト政治的なユートピアを共有していた。同時に、ブルガリアの社会学者Andrey Raitchevが述べたように、特徴は過去に投影された。「社会主義以前にファシズムは存在したのか？」が主なテーマだった。反共産主義者たちは、保守的な歴史修正主義にかかわった。かれらの主要なスローガンは「45年（の共産主義）はもう十分だ！」であり、ファシズムは、社会主義体制を合法化し、権力の暴威を正当化する共産主義者の誇張だとかれらは主張した。以前の共産主義者たちは一方では、多くの場合、敵対者を報復戦主唱者やファシスト呼ばわりした。なぜなら敵対者は、ファシズムによる凶行を表沙汰にしようとしないからだという。これはある種、古くさい議論だが、ブルガリアのユダヤ系住民がたどった悲運――支離滅裂な解釈の餌食となる運命――にまつわる時には、ブルガリアの特徴を表したのである。

> ユダヤ人に対するブルガリアの取り扱いに関する２つの語り

第二次世界大戦中、ブルガリアは枢軸国に加わり、現在のマケドニアのほぼ全てと、北部ギリシャ、そして今日のセルビア地域のいくつかを併合した。

「旧」ブルガリア領域のユダヤ系住民は、とてつもない抑圧をうけた（市

>>

民権の剥奪、反ユダヤ主義的法律、追放、強制収容所など）が、「最終解決法」（訳注：ナチスドイツによるユダヤ人大量虐殺）は、反ファシスト闘士とエリート一派双方によって抵抗をうけ、ぎりぎりのところで回避された。一方「新」領域ではそのようなことはなく、「鋳造された」ユダヤ系住民は最終的にゲットーに追放された。

これらの出来事は　以前の共産主義者と反共産主義者双方の議論を刺激した。1990年代の各派新聞について、批判的社会科学研究所が実施した社会学的研究は、以前の共産主義者たちが、社会主義以前の体制がもつ「ファシストの本性」を証明するため、「新」領域のユダヤ系住民たちの根絶に焦点をあわせたと指摘した。対称的に、反共産主義者たちは「旧」領域の「最終解決法」が回避された事実に注目していた。それは主に、エリート内部からの抵抗が理由だった。反ファシスト闘士の役割をかれらは低く評価し――共産主義の内では根強い――多くの場合、かれらを“犯罪者”として描いた。

両者の語り口に共通するのは、敵対者の議論を正統なものとして認識できない点である。ブルガリアの社会学者Lilyana　Deyanovaは、この現象をポストコミュニスト否定主義と名付けた。否定主義は過去だけでなく「他者」の立場の存在を認めることの不可能性を表している。それはしばしば「他者」の「正しくない」記憶への批判を呼びかけ、欧州人の幅広い興味と新しい記憶をめぐる慣習の傾向に、ぴったりと当てはまる。社会的記憶のこうしたモードに埋め込まれた主観は、かれらの敵対者を極端に相容れないものとみなす。政治上の敵は根本的な異質――異常で、愛国心がない、裏切り者で嘘つきであり、国家への外国人侵入者――として切り取られる。こうした「敵対的」言説では、国民は調和のとれた全体と捉えられている。この陳腐な議論は、政治を「ユダヤ系民族は助かったのか否か？」「ブルガリアは民主的かファシスト的か？」という問いに矮小化してしまう。他の意見はそこには全く存在しない。

2001年以降、安定した政治的同一性は、それらを代表する二つの正統モデルとともに崩壊した。ユダヤ系住民の運命に関しては、反共産主義者の語り方が流行した。戦後の共産主義者の裁判は、正式には非合法とみなされたが、ファシスト、協力者、死刑執行人に対抗した裁判を含んでいた。占領地域からのユダヤ人の強制送還は「われわらに選択肢はなかった」もしくは「これらの地域は、実際はわれわれのものではない」などとして言い抜けられた。しかしながら、矛盾したことに、「自由」と「大ブルガリアの統一」としての植民地（領土）拡大を賞賛する傾向のある言説内で、こうしたことが生じたのである。近年見られるようになったのは語り口の統合だけでなく、それのマケドニアへの投影である。これは、ブルガリアの政治やメディアの主流派からは、歴史の「歪曲」だと非難されている。そのため、近年建設されたスコピア（訳注：マケドニアの首都）のホロコースト博物館は、「嘘」「虚無」等と描かれる。「共産主義者」だけでなく、今や敵とみなされているマケドニア人も、ホロコーストへのブルガリアの関与にまつわる嘘を拡げている、というわけである。

> ファシズムの現実の回避

1989年以降の記憶をめぐる政治は、事実上、ナチスと反ユダヤ主義、同時に、ファシズム自身の特殊な思考を取り除いてきた。Dimitrov（ブルガリアの共産主義のリーダー）のによる古典的定義（ファシズムを階級制度という意味にしてしまう）から生じ、国家社会主義の間存続していたある極端なファシズム理論は、別の物に取って代わった。ホロコーストは、やや狂信的な展開のなかで、浅薄な道徳主義とさせられてしまった。その目的は、「我々は」善人なのか悪魔なのかを「我々」に伝えることである。「差別と不寛容」を強いるが、幸運にも「伝統的に寛容な市民社会」の抵抗をうけた不可解な外国人部隊への非難のせいで、もっと必要とされるファシズムについて討論は避けられてしまった。ブルガリアファシズムの現実は、ファシズムの正式な特徴（の欠落）を強調することで、低く見積もられたのである。みずからをファシストと呼ぶ大衆政党はひとつもなかった。つまりは、ファシズムは存在しなかった、ということになるのだ。膨大な量のファシズムの文献は、「二つの全体主義」についての還元主義的比較を除いてほとんど言及されることがない。たとえば、ファシストのイデオロギーとその左派と右派を超えたソレル的欲望についてのZeev Sternhellの分析は、触れられることが全くない。しかしまた、議論から欠落しているのは、ファシズムの活力であり、さらにシティズンシップの非普遍化、若者によるファシズムカルトと活動、ナチスの概念「ユダヤ・ボルシェビズム」、ファシスト的反共産主義などである。要するに、現代のポスト政治的ユートピアと類似する不安を招き入れるファシズム概念をも避けようという試みがみられるのだ。残念なことに、こうした（議論の）空白は政治的主流派に限られたことではない――それらは　アカデミックの世界にも深く浸透しており、多くの社会学者も含まれている。

政治およびジャーナリストの主流派は、「ブルガリアの英雄的行為」と「ブルガリアのユダヤ系の人びとを救済した」戦時下の「市民団体」を賛美し、現代好まれる考えを過去に重ね合わせている。主流派はたくさんの抵抗者が現に存在する一方で、強力なナチス賛同的「市民団体」もあったという現実を棚に上げている。これは以下の問いを発する。どの「市民団体会」が抵抗したのか、どのブルガリア人がユダヤ人の強制退去を止めたのか。二つ以上のブルガリアがあった（そして未だにある）という本質主義的で非歴史的な語りの裏に、何が隠されているのか。しかし、最近になってその問題への批判的研究と出版物が登場し、主に歴史家と社会学者が問題提起をしている。2012年後半、「汝の過去を知れ」というタイトルの画期的な会議を、最大規模の人権NGOが組織した。目標は重要な学術的仕事をより広く公衆に広めることだった。しかし、こうした努力は、幅広い議論を引き起こすまでにはいたっていない。さらに「自発的な死刑執行人」が多数派を軽蔑することになるため、このような新たな人びとは、主流派の非難と同時に「救世主の民」の称揚が相反する意味に転化するというリスクを犯しているのである。（三部倫子訳）■

> Social Science in the Making of Malaysia

マレーシア形成期の社会科学

by Shamsul A.B., The National University of Malaysia (UKM), Kuala Lumpur, Malaysia

レイモンド・ファース　Raymond Firth (1901-2002)。マレーシア人類学の植民地的形成に影響を与えた人物。

人類学と社会学がそれら独自のアカデミックな学部とともに大学の科目として公式に導入されるずっと前に、両学問は、マラヤ、1963年以降のマレーシアに関する知識を知らせるという植民地支配的な知の構築に貢献した。

植民地時代において、植民地支配的な知は、統治するために「境界とルール」の枠組みを提供した。そして同様に、その知は、日常的な州の運用における「境界とルール」の原則に関する手段を正当化した。1823年に設立されたThe Royal Society of Great Britain and Irelandは、社会科学がマラヤ、そののちのマレーシアにおいて、植民地支配的な知やルールに関するテクノロジーを高めるための主な機関であった。それは、1878年に設立されたthe Straits Settlement of Malaya and Borneoの中に部門があり、カルカッタの東インド会社によって運用された。The Straits Branch of the Royal Asiatic Societyは、Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society (JSBRAS)という独自のジャーナルを持っていた。1923年、それはthe Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society (JMBRAS)にジャーナル名を変更し、1964年にthe Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society (JMBRAS)になった。この学協会はまた、独自MBRAS Monographsも出版した。

約135年の間、マレーシアの知はが学協会の出版物を通して形成された。その内容は、歴史、地理学、文学、言語、文化、地域研究、直仏学や動物学などに関するものが含まれていた。主な寄稿者は、マラヤに配置される前に、オックスフォード、ケンブリッジ、ロンドンにおいて人類学の教育を受けた植民地の公務員たちであった。John Gullick (1916-2012)は、マラヤで仕えて、歴史社会学に枠付けられたマラヤの歴史や社会に関する少なくとも12冊の本を執筆した職員であった。これらのうち多くは、現地の大学においてテキストとして後に採用された。

それゆえ、第二次世界大戦後、the Colonial Office to Malayaによって送り込まれた最初の研究者たちは2人の世界的に著名なアカデミシャンであったことは驚くに値しない。その2人とは、マラヤにおいて社会科学研究の状況を研究するためにやってきた社会人類学者のレイモンド・ファースRaymond Firthとマラヤとサラワクで社会の社会経済的な状況を研究するためにやってきたエドムンド・リーチEdmund Leachであった。ファースとリーチは多くの学生を従えていた。その学生たちは、広大なフィールドワークを行った。例えば、1950年代初頭のサラワクにおいて中国人や現地のグループについて着目したり、シンガポールにおいてマラヤ人や中国人の文化的習慣を調査したり、ネグリセンビランにおいて母系社会を調査したり、ジョホールにおいて中国とマラヤの関係におけるthe Kiyai Sallehによ

>>

る至福千年運動のインパクトに関する調査であった。

ロンドンでファースの下で学んだ次世代の学生たちには、Abdul Kahar Bador（マラヤの伝統的な指導者を研究した）、Mokhzani Rahim（マラヤの信頼システムを研究した）、Syed Husin Ali（マラヤの農民とリーダーシップを研究した）が含まれていた。彼らのすべてはマラヤ大学で教えるために戻ってきた。そしてそこで、アムステルダムで訓練を受けた社会学者、Syed Hussein Alatasは（彼の著名な本にはThe Myth of the Lazy Native (1977)がある）、エドワードサイードのオリエンタリズムのアイデアに貢献した。これらの学者は、人類学と社会学に関する研究や教育において核心を作り上げた。

1969年5月13日の民族的な暴動の余波の中、上記で言及した4人の社会人類学者は、"healing process"において重要な公的な役割を演じた。それは、the National Consultative Councilの行動に参加することを通して行われ、国に平和と安定をもたらしたのであった。Social Science Research for National Unity: A Confidential Report to the Government of Malaysia (1970)というタイトルのフォード財団レポートは、政府によって承認され、人類学、社会学、政治学、心理学、コミュニケーションスタディーズが大学の教育科目として導入された。そして、それは1978年に設立されたthe Malaysian Association of Social Sciencesの基礎となった。

政府はまた、1969年7月、民族的な暴動の直後にa Department of National Unityを設立した。その指導者や職員の多くは、新しい学部やUMのマラヤスタディーズの古い学部を卒業した人類学者や社会学者であった。実際、1980年代まで、マレーシアの多くのトップ公務員は同じこれらの学部の卒業生たちであった。

人類学者や社会学者の最初の一団は、1974年と1975年にUMとUKMを卒業した。彼ら/彼女らは公的セクターと私的セクターの両方を享受しており、同時代の問題を解明する、あるいはクライアントに仕えるよう強く求められていた"ジェネラリスト"として雇用先を見つけた。多民族で文化的にも多様なマレーシアにおいて「文化を普及するため」の彼ら/彼女らの能力は、21世紀にまたぐ強い要求のもとにあった。マレーシアの人類学講師、Bibliography of Ethnic Relations in Malaysia (1999)を編集したTan Chee Bengは、民族関係の研究に対してとりわけ重要な貢献をした。2005年、マレーシアの閣僚は、マレーシアの20の公立大学の入学時にすべての学生に対して"Ethnic Relations Course"を必修として導入するかを討論した。そのコースのためのモジュールは、私自身が率いたチームによって準備され、2007年に私はUKMで本格的なInstitute of Ethnic Studies (KITA)の設立を任せられた。

Syed Hussein Alatas (1928-2007)はマレーシアの著名な公的知識人の一人であり、政治家であり、また植民地的思想に対する批判でも知られている、マレーシア社会学創設の父である。

つまり、人類学者と社会学者はマレーシアを形成するうえで極めて重要な役割を演じてきたのである。特に、社会の団結を維持するうえで求められている彼ら／彼女らは、「マレーシアの理念Idea of Malaysia」、つまり今日のような社会では珍しい安定した緊張状態にある多元的な社会や民族的な複雑性にとって、欠かせない存在であり続けているのである。（仲修平訳）■

> The Life and Times of a Committed Sociologist

An Interview with Dato Rahman Embong

献身的な社会学者の人生と時代
――Dato Rahman Embongへのインタビュー――

Dato Rahman Embong。

マレーシアの著名な社会学者であり、長きに渡って多くの人々に知られている知識人であるRahman Embongが、彼の生活史と、コロニアル時代からポストコロニアル時代の闘争や抑圧を経た新たな幕開けである1990年以後のマレーシアの社会学の発展との関連性を探る。

MB：コロニアリズムの時代に育ったあなたは、どのような教育を受けてきましたか。これは、とても重要なことのように思われます。

RE：社会状況をみてみましょう。Michael、あなたは最近のマレーシアを訪れていますね。最近のマレーシアは、高所得を求める2800万人が住み、石油で繁栄しており、2020年までに先進国になろうとしている国です。マレーシアは1957年に独立し、農業停滞期を脱し商品生産国となり、発展している。あなたが訪れている間に、マレーシアの動向を感じられる首都のクアラルンプールに連れて行き、そして新たな行政中心地のプトラジャヤにも行った。プトラジャヤは、天然ゴムと油やしを栽培しており、原住民であるOrang Asliが住んでいたジャングルであった土地につくられた。ある人々は、行政の中心地を、華麗なる場所、華やかな最高基準の都市、そして多くの途上国の羨望の的としてみている。後世のためにこれを彼の遺産として残すことは、マハティール首相の夢だったのです。

しかし、私の生活史に目を移してみましょう。私は、裕福ではないが貧しくもない中流の小作人の一家に生まれた。出身地はトレンガヌ州（Terengganu）で、そこはマレー半島（かつてはマラヤとして知られていた）の東海岸の最も発展していない州だった。私は1944年に生まれたが、その当時は、日本の占領が終焉を迎えつつあり、大半の家族は食糧不足と配給制度に非常に苦しめられていた時期だった。

>>

私の父は、padiの農場主であり、地方のモスクの指導者（イマーム）であり、子供を英語の学校ではなく、アラビア語の学校か宗教の学校に通わせたかった。父もまた、日本の侵攻から逃げてきたイギリス人をののしっていたのです。
父と母はとても勤勉で、最年少の私と育ちざかりの8人の子供育てるために、padiの土地を耕作していた。その村に住む他の家族も農業を営んでいた。これらの小作人は、オリエンタリストが提唱した侮辱する意味での“lazy native” シンドロームには当てはまらなかった。これは、後期のSyed Hussein Alatasが今では古典となった1977年の本の中で正体を暴露した神話です。

父は、私が生まれた5年後の1949年に亡くなりました。父は何日も苦しんだ後、マラリアで亡くなったと聞いてます。私たちはとても悲しかった。現在とは違い当時は、病院は遠く、診療所は無く、医者もおらず、父がどんな病気で苦しんでいるのか分からなかった。父が亡くなった後、母は田舎の行商人になり、農作物、自家製クッキー、たばこ、そして他の品物などを小さな村の市場を転々としながら、子供たちを育てていくという厳しい生活を送っていたのです。

私は、最年少で当時はまだ学校に通っていたため、年上の兄弟のように様々な仕事をするといった苦しい体験をせずにすみました。しかし、私は、田舎の市場に行く母について行き、母が持ちきれないバスケットを私の小さな手で支え、それらを運ぶのを手伝ってました。当時、母は現金払いで持ち帰りの田舎の交換経済の一部を担っていたのです。
村には電気や水道はほとんど無かった。家には机も椅子も無かった。夜には、ちらちらと点灯するランプで照らしながら宿題をしなければならなかった。私の兄姉は、マレー語の小学校に行き、アラビア語あるいは宗教の学校で1年か2年通ったが、その後は仕事のために学校に通うことを断念した。しかし、私は違う境遇であった。母と兄たちは私に彼らと同じ道をたどってほしいとは思っていなかった。彼らは、私を村から出て成功してほしいと望んだ。そのため私は、マレーの小学校教育と基本的な宗教教育を受けた後、入試に合格し、街で唯一の国立の英語の学校に通った。私は、3年次に6年生に飛び級できる特別なクラスである「スペシャルマレークラス」に入った。私は首席であったため、マレー半島の西海岸にある王立軍事大学Royal Military College に入学するための奨学金が得られた。その学校は地方の軍将校と行政官を育成するための学校であり、1953年にイギリスによって開校されたエリートが通うマルチエスニックな学校である。1960年にトレンガヌ州からその学校に通えたのは私たちを入れて5人だった。地域、そして後に国を超えて移動することができたのは私の年代では私一人でした。
王立軍事大学の司令官、研究の管理者、そして教師の多くは、イギリス人だった。彼らは良い人々だったけれども、彼らの支援をしているという態度は私たちの間に反植民地感情を抱く要因となった。その当時は1957年の独立後数年経っただけだということを思い出してください。マレーシア人による政策が効果を見せ始めるのは1960年代後半から70年代前半であったのです。

1964年に高等学校を卒業した後、私は、マレーシアのエリート官僚になるために、大学教育を終えて連邦政府の奨学金でイギリスに留学しました。何人かのマレーシア人の学生が同様の奨学金を得てイギリスに留学したのです。

MB：イギリスに留学し、レスター大学とロンドン大学東洋アフリカ研究学院で学位を取得したことで、あなたの知的、政治的発展にそれらはどのような影響を与えましたか。

RE:イギリスに留学したことは、私の人生の重大なターニングポイントになっています。留学したことで、私の知識は広がりと深みを増し、私の理想はより強固なものになりました。私は社会学を勉強するために1965年にレスター大学に留学し1968年に学士号を取得した後、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院で1970年に地域研究で修士号を取得しました。当時、イギリスやヨーロッパで一流の学者の何人かから指導を受けた。60年代後半のロンドン――ひいてはイギリスやヨーロッパ――は、学生運動と特にベトナム侵略戦争に反対する反米帝国主義で騒然としていました。文化大革命やキューバ革命もまた多く人々に影響を与えたのです。私は社会学の様々な理論に触れ――構造機能主義からマルクス主義や社会構築主義――、様々な本や『New Left Review』や『 Monthly Review』のような左翼雑誌も読みました。このことで、私は政治的・急進的になった。ロンドンにいた私と同世代の多くのマレーシア人の留学生も同じような運動に影響されたのです。

MB：マレーシアに戻った時、何があったのか。マレーシアはすでに独立して15年経っていたが、あなたはそのようなマレーシアにどのように適応しましたか。

RE：私は、1969年5月13日にクアラルンプールで起こったひどい人種暴動の19か月後の1970年12月31日に戻りました。イギリスに滞在していた時、私はマレーシアでの出来事にも気をつけていました。1969年の暴動のニュースは思いもかけないものでした。その時、私は学生のリーダーであったため、友人とともに学生――マレー人、中国人、インド人など――を教育するためのフォーラムやセミナーのような様々な活動を催し、学生たちを団結させたのです。私たちは、1969年の暴動は人種ではなく階級の問題である、と強く主張しました。

マレーシアに帰国すると、教育手段としてマレー語を使用する新たな大学が設立されました。その大学は、教育手段として英語を使用しているマラヤのより確立された大学の次に設立されたのです。その新しい大学であるUniversiti Kebangsaan Malaysia（マレーシアの国立大学―UKM）は1970年5月に設立された。その大学は、国語であるマレー語を使用する大学を求めているマレー人のナショナリストの闘争の結果であり、主に国立学校出身の学生を獲得することを目的としていた。マレー語政策は、1980年代までにすべての大学で実を結んだ。注意しなければならないのは、当時、学生はエリート集団であり、18-24歳の年齢群の1%であった。しかし、現在のその数値は、30%まで上昇していたことです。

MB：社会学に関してはどうですか。

RE：その当時、社会学において重要な進展がありました。Samuel Huntington教授がリーダーとなり、Manning Nash教授、Myron Weiner教授、そして Nathan Glazer教授がアシストしたThe Harvard Advisory Service in the Prime Minister's Departmentが、政府に「Social Science Research for National Unity」というタイトルのレポートを提出したのです。そこでは、1969年の暴動の後、国家統一の問題を扱い、そして国家建設における闘争状況を扱うことのできる専門化を養成するためにも、マレーシアの大学には社会学、人類学、心理学、そして政治学の学部を設立することが推奨されていました。そして、UKMは人類学と心理学の学部を設立し、教員の募集を開始した。そこで、私は

>>

公務員になるための届け出を提出したとき、私はUKMに行くようを告げられた。UKMで教えるためには、私のように修士号を取得している人が必要で、ロンドンで取得しているならなおのこと必要とされていたということを私は聞いた。胸中では、私はそのこと――大学の教員のポスト――を望んでいたのです。

MB：たとえハーバードのチームの援助のもとで国家建設の問題を扱っていても、1970年代前半には社会科学が注目を集めていたようにみられます。このことは正しいのですか。

RE：1960年代後半から1970年代前半のマレーシアは、社会科学と人文科学が注目を集めた時代で、論争の時代でした。しかし、私はハーバードのチームを視野に入れていた。記録として、私はUKMの人類学と社会学の学部をつくった4分の1のメンバーであり、3分の1はマラヤ大学の出身です。実際、1960年代にはすでに、ハーバード大学のチームが推奨する以前に、人類学と社会学の入門編は、マラヤ大学（UM）のマラヤスタディーズ学部のCulture Streamのもとで教えられていた。有名な社会学者では、Sutan Takdir Alisjahbana, Syed Hussein Alatas（彼は後にシンガポールに移住した）、そしてSyed Husin Aliいた。そのため、マレーシアの社会学と人類学は「近代化と国家建設の子ども」であると私たちは考えていますが、UMの学者がすでにその基礎をつくったので、ハーバードのチームが唯一の産婆ではありません。

素晴らしい論争により、学問の境界が変化しました。文学者は多くの作品を制作し、国文学の制度を主張し、「芸術のための芸術」に対して「社会のための芸術」を擁護しました。歴史家は歴史における植民地的な視点を否認する。経済家はいわゆる「多くの経済的対話」を行っていた。そして、我々若手の社会学者と人類学者は、実証主義、構造機能主義、そしてハーバードのチームのメンバーにより発展された近代化理論に対するパラダイム闘争を行っていたのです。もう一つの最前線では、学生の一部がイスラム教のdakwah運動と若者の運動が始まっていました。キャンパスは、ベトナムにおけるアメリカ帝国主義者による戦争とイスラエルによるパレスチナ侵略に反対する学生と知識人の活動家であふれていた。国内で、私たちは、土地を持たない小作人と都市で不法占拠しているホームレスの闘争を援助し、すべての家族の約50%が影響を受けている貧困に反対する運動を起こし、そして支配しているエリート層の汚職と一攫千金的な精神性に反対したのです。

個人的には、アカデミックライフとロンドン生活で培った学生運動を継続していました。私の同僚は農村社会学、都市社会学、人種関係などを教えていましたが、私の指針となっている社会学理論をもとに、私は２つのコース――開発の社会学と政治社会学――の学生を教えた。私は、1973年に「Truth」と呼ばれている月刊誌をスタートさせたが、7ヶ月で禁止になった。私の友人と私がしたことは、アカデミック社会学でもクリティカル社会学でもなく、私たちは当時そのように名付けていなかったが、それは公共社会学であった。私の立場は明確でした。価値自由の社会学ではなく、マルチナショナルなコーポレーションに寄与する近代化理論の発展です。Gunder Frankに則すと、私たちは発展と未発展は同じコインの裏表であり、そして西洋から継承している開発の社会学は、扱っているはずの国々と同様に「十分開発されていない」状態でした。

MB：そして抑圧が訪れた。抑圧についてお話し下さい、社会学はどのような影響を受けたのかを。

RE：1974年は、多くの人々の生活においてもう一つの重要なターニングポイントでした。1974年の8月にUKMで、マレーシアでは初めての社会学、人類学、そして心理学の役割と方向性に関するナショナルカンファレンスが開催された。その活発なカンファレンスでは、私たちが推奨し促進すべき社会学と社会科学の分野について、激しい議論が交わされた。それはパラダイム闘争とも表現できた。様々なマレーシアの大学から研究員や学生ともに講演者が積極的に参加した。そこで、私たちは、1978年に設立されたマレーシア社会科学協会（MSSA）の設立を提案したのです。

1974年に最高潮に達した学生運動と知的活動主義は、抑圧されるとすぐ継続できなくなりました。1974年の12月には学生のリーダーや知的活動家らを標的にして多くの逮捕者がでた。このことは、次に出現する国家の歴史に大きな影響をもたらした、その時代のターニングポイントであした。マレーシアの野党の現在のリーダーで、ムスリムの若者の運動に最も影響力をもっていたAnwar Ibrahimは、逮捕され監禁された。釈放された後、Anwarはマハティール首相にリクルートされ、彼らの関係が続いていた時は副首相にまで登りつめたが、Anwarは1998年に解雇された。ひとつの歴史が終わったのです。

学界では、その当時マレーシアの最も年長の社会学者の一人でUM出身のSyed Husin Aliが逮捕され、1980年までの6年間拘禁されていました。興味深いことですが、彼は拘禁されているにもかかわらず、大学で教授として仕事を続けていた。彼は学者間でとても信望があつく、刑務所を出てすぐに彼はマレーシア社会科学協会の会長に選出され、1990年までの10年間その職務を全うしたのです。
1975年には、次々に多くの者が逮捕されたが、政府は、大学と、学問の自由と大学の自治を縮小するような様々な修正案を提出することによって1971年に初めて公表されたUniversity Colleges Actを厳しくした。これは、長年の間、大学での学術活動と学生生活を損なう抑圧行為となり、その抑圧行為が緩和されたのは晩年でした。

MB：1991年後になり、はじめて反対派との和解交渉が行われ、大学は再び開放されたようですが、その時あなたは何をしていたのですか。

RE：あなたが推測しているように、私は検挙を逃れ、1974年の取り締まりの後、マレーシアをあとにしなければならなかったのです。ほぼ20年間マレーシアの学界から出ていましたが、私は学界の発展について行き、調査と執筆を止めませんでした。

私は、冷戦終結後数年たった1992年に戻りました。学界に異議を申し立てていたUKMの専門的なアプローチと結びついた政府の発議と調停により、私は1995年に大学の同じ学部に再就職することができたのです。初期にくらべ、状況は大きく変化した。大学と政府は市場の圧力のもとにあり、市場の要請を受け入れ、そして教育は公共物というよりもむしろ商品として扱われるようになった。社会学と人類学を含んだ伝統的な社会科学と人文科学は、科学技術と経営学への影響力を失った。私の大学の社会科学と人文科学の学部は再編成され、社会学と人類学は学部としての地位を失った。おそらく人類学部と社会学部はマレーシアの歴史上で1970年代に最も影響力があったが、それらは

>>

今日のようにほんの小さな科目にすぎなくなっていました。私と同世代の多くの年長の社会学者と人類学者はリタイアしたか転職しました。しかし、以前の学部からの著名な社会人類学者の一人は今もなお現役です。彼は非常に重要な調査機関、UKMのエスニックスタディーズの研究所で指導者の地位にあり、学術的で公共的な政策の仕事に従事しています。

私に関しては、学部が再編成される前にその学部を去り、1995年に設立された領域横断的な社会科学組織である、UKMのInstitute of Malaysian and International Studiesでフルタイムのリサーチフェローになりました。私は2001年に開発の社会学で教授になり、2009年に名誉教授になりました。

私がマレーシアに帰国した時に最初したことの一つは、社会科学協会との関係を回復することでした。私は2000年にMSSAの会長に選出され、Syed Husin Aliのように10年間そのポストに就いていました。会長の任を降りた後、私は協会のスペシャルアドバイザーになり、今日まで私はそのポストにいます。

MB：あなたは40年間以上マレーシアの社会学の発展をみてきましたが、最も重要だったのはどの時期だと考えているのですか。

RE：状況が変化したにもかかわらず、私はトンネルの終わりに光をみています。学際的な研究が強調されているが、若い学者の間では社会学への関心がよみがえってきている。彼らは、社会状況を分析しその変化を提案するためには、強固な方法論を有している社会学的な視点と社会学理論が、適切であり有用性があるとみなしている。その精神と理念は今もなお存在している。他の学問分野に比べ人数は少ないけれど、その数は増加している。MSSAによると社会学への関心を示す人の数は増加している。そして、国際社会学会会長であるMichael　Burawoyと対話する機会を持つことができたことは、非常に良かった。この対話により、関心が深まり、視野が広がったのです。また、一緒に仕事ができることを期待しており、私はこの協働がマレーシアの社会学と社会科学を前進させるきっかけになるのではないかと思っております。（小坂有資訳）■

> Tunisian Sociology after the Revolution

革命後のチュニジア社会学

by Mounir Saidani, University of Tunis El Manar, Tunisia
モウニア・サイダニ（チュニス・エル・マナール大学、チュニジア）

Mohammed Bouazizi,はチュニジア人の若者で果物売りであったが、のちにアラブの春のきっかけとなる象徴的な人物となった。

現在のチュニジア情勢に関する相反する３側面が、社会学者の仕事を方向付けている。つまり、ものすごい政治的変化、拡大した表現の自由、社会運動の新傾向の到来である。社会変化の速さを受けて、チュニジアの社会学者は、多くがそれぞれのやり方で対応してきた。

> 革命後の状況

ベン・アリ独裁政権は2011年の1月14日に幕を閉じた。それ以降この国は、いわゆる「チュニジア流の生活様式」への最大の脅威とみられる新たな「公共の敵」であるサラフィストを中心に展開する多くの衝突をともなう「万人の万人に対する闘争」状態を経験した。慈善行為、福祉、博愛、文化団体、NGOなども、それらの性格にも関わらず、政界を深く二分する争いに巻き込まれた。約150の政党と15000もの団体がある事実が、状況の簡単な了解を生み出さなかった。社会統計や他の種類のデータも現在では利用可能性が高まっているが、きわめて混乱した行政機関と、業務に関する改革がとても遅いことによって、チュニジア社会のより正確な姿を描き出すには、必ずしも助けにならない。雑誌、新聞、ソーシャルメディア、公共・民間のテレビ・チャンネル（全部で10以上）、ラジオ・チャンネル（約15で大部分はFM）などの急増で明らかなような表現の自由を得て、通りや広場は政治闘争の舞台、公的な意見を形成するラボになった。

過去の関係者は現在の闘争の一部であり、昔の関心事は現在乗り越えるべき課題であり、社会学者の仕事を危険の伴うものとするあいまいな政治的不透明性がある。社会運動は、特に2011年10月23日の選挙後において、より制御がきかなくなっている。ローカルなゼネスト、座り込みや治安警察との衝突が国中、特に革命発祥の地であるチュニジア中西部の小さな町に広がった。地方のリーダーは民衆の抗議（それ自体はソーシャル・ネットワークの拡大を通じて行われるが）に対してより説明責任を求められる。社会がどうなるかは、公務の専門家や科学者でも全く予測不能である。社会運動は、彼らの環境、人種、宗教、ジェンダーに関わらず、新たな要求を口にし、新たな目標に向かっている。社会運動の分析は毎日更新されなければならない。

> 騒乱の時代における社会学

チュニジアにある大学の社会学部に在籍する60人の専門社会学者は、3つのカテゴリーに分けられる。多数ではないが、4，5人は、混乱についての本を出版している。同じくらいの人が論文を公表している。大多数は「進行中の社会運動はその混沌として急速に変化する性質から分析不可能」として、主張を公表することはしていない。革命前は、社会運動や関連する事柄にかかわっていた社会学者は、多くて2，3人だった。革命後の1年目は、2番目のカテゴリーに属する社会学者は、理論的にリスクの少ない性格の論文やただ彼ら自身について書くことで、全く満足していられた。週刊もしくは日刊の新聞が彼らの通常の表現手段であり、その記事は国で大まかに何が起こっているのかを考察するものだった。より焦点を絞った論文では、暴動の関係者がどういう人かを探ろうとしていた。ブログやフェイスブックで感想を述べる社会学者もいた。

最初は、社会学者の声や意見に関

>>

心を示すメディアはほとんどなかったが、数ヶ月が経過して変わった。彼らの知識が流布するにつれ、チュニジアの社会学者は、彼らの提供するものへの需要が、新たな方法で社会的事柄に関与する政治戦略の一つであると、メディア媒体との新たな関係を経験している。理論的もしくは知的な雑誌の編集チームのメンバーになった専門社会学者もいるが、何の学問的体制ももたない研究センターに巻き込まれた社会学者もいる。どちらのグループも科学的知識を生み出していない。彼らはそれらの場所でどのような仕事をしているのか。彼らの仕事環境については、誰も楽観的ではいられないだろう。次なる疑問は、これらの新しいメディア媒体が、公共社会学への新たな可能性を見せてくれるものなのか、論争に飛びつく政治的策略にすぎないのかという点である。

本を出版した一人のチュニジア人社会学者は「私が出版したのは私ひとりの努力によるものだ。誰からもサポートは受けていない」と言った。別の人は「高い地位にいるわけではない我々には何の機会もない。活動の多くは、大学内で組織されたものでさえ、すでに「認められた」人々にとってのみである」と言い返す。それゆえ、若い社会学者は特に困難な状況に直面している。つまり、「すべて自身で対処しなければならない状況に直面したとき、若い社会学者は放心状態になろう」。それにもかかわらず、私たちはInstitut de Recherche sur le Maghreb Contemporain (IRMC)との連携で2010年7月に執筆ワークショップを開催後、フランス語で書かれた約20の論文を集約し「今日のチュニジア社会を考える：人文社会科学の若い研究者」(Penser la société tunisienne aujourd'hui : La jeune recherche en sciences humaines et sociales)と題した新規の出版を行った。他方で、独裁政権の崩壊以降、25年以上の歴史を持つチュニジア社会学会は、社会学の学生が集まる機会を少しだけしか作れなかった。

チュニジアの社会学者が選んだひとつの反応は、海外で出版し、広い視界を確保しようとするものだ。しかし、「アラブ革命の社会学」という題の下、ブーアジジ(焼身自殺しチュニジア革命のきっかけとなった露天商)生誕の地であるシディブジッドで2011年3月に開催された最初の国際社会学シンポジウムは、たった7人のチュニジア人社会学者(そのうち1人はベイルート在住)、1人のアルジェリア人、1人のイギリス出身レバノン人しか引きつけなかった。

社会運動との関係を築こうとする社会学者もいる。例えば「私自身は、社会運動の活動家です。社会学的観点を展開することを通じて自身の立場を向上させようとしている」とある同僚は述べた。別の人は「それは簡単ではない。チュニジアにおける社会運動は新しく、反対する政治家と政府の支持者の両者が多くの障害を作っている。訓練、概念を教え込むこと、関係者を巻き込むことは同時にそして民主主義的な方法で行われなければならない。チーム内部の力学を尊重しなければならない。自身の意思以外に何の武器もなく孤立しているならば、困難になるだろう」と証言する。2011～2012年の学年が始まってから、若い研究者は、特に修士号のためや数は少ないが博士号のためにも、社会運動にますます関心を示してきた。これらの研究の多くはフィールドワーク、調査、他の種類の学術調査に基づいており、若者の役割やソーシャルメディア、参加者の記憶に焦点を当てている。

> 新たな研究機会

研究の状況は以前よりかなり開けている。過去にあって表現の自由を制約していた政治的・行政的な報復の恐れは取り除かれ、インタビューを受ける側も自身の意見や経験を自由に打ち明ける。研究者は、写真や録画された証言、時には日記を用いることができる。それにもかかわらず、新しい理論的枠組みは未発達の段階にある。

その変化しつつある社会を分析しているチュニジアの社会学者は、研究の新たなビジョンを開拓するためにはまだ幾多の障害に直面していると言える。それでも、独裁政権後の時代における早く深い社会変化は、社会の研究へより科学的にアプローチすることにつながっている。しかしながら、疑問が残っている。つまり、社会学者は、社会の発展に向けた新たな使命を果たすために、拡大した機会をうまく利用することができるだろうという疑問が。(高見具広訳) ■

> Cinematic Sociology

An Interview with Joyce Sebag and Jean-Pierre Durand

映画の社会学
――フランスジョイス・セバーグと ジャン＝ピエール・デュランとの対話――

University of Evry, France　（エヴリ大学、フランス）

Joyce Sebag。

Jean-Pierre Durand。

ジョイス・セバーグとジャン＝ピエール・デュランは、パリのちょうど外部に位置するエヴリ大学のピエール・ナヴィル研究所で、映画の社会学を専門としている夫婦である。社会学研究に携わって二十余年後の1995年に、セバーグとデュランは、長きにわたる表象（the image）への関心から、「表象と社会」（Images and Society）という修士課程を立ち上げるに至った。修士と博士は、社会科学の専門的知識に基づく映画製作者の教育というユニークな取り合わせを学び、社会学的映画の製作を必要条件として学位を授与される。これまでの間に、セバーグとデュランは3本のドキュメンタリー映画を製作してもいる。『ラインの上の夢』はカリフォルニアの自動車工場において新たに導入された労働条件についての映画、『日産：マネジメントの歴史』は多国籍企業の経営戦略についての映画、『ボストンにおけるアファーマティブ・アクションの50年』はアメリカ合衆国におけるアファーマティブ・アクションについての映画である。こうした努力の甲斐あって、フランス社会学会は先ごろ、映画の社会学を公式の学問分野として認めた。トゥールーズ大学高等研究所で博士研究員をしているジョルダナ・マトロンが、かれらをインタビューした。

JM（ジョルダナ・マトロン）：あなた方はご自分たちの行なっていることを、なぜ映像の社会学（visual sociology）ではなく映画の社会学（cinematic sociology）と呼んでいるのですか。

JS（ジョイス・セバーグ）：私が思うに、映像の社会学はこれまでもずっと存在していました。しかしそれは、表象（images）を用いて考える方法というよりは、写真や映画そのものについての分析だったと思うのです。私たちがやりたいのは、社会学が写真や映画を用いて物事を明示する方法を見つけることなのです。

JM：映画の社会学者に固有のスキルは何だとお考えですか。

JS：何かを研究するとき、何か非常に理性的なことを成し

>>

遂げるように思います。でも、その何かからはかなり距離があるのです。この場合、研究する者はその対象の「外側」（”outside”）にいると思っているのです。研究の支柱として映画というメディアを利用する理由の一つは、研究する者がつねにその研究の内側にいるということを示すためなのです。

JM：それがこの方法の必然的な部分であると。

JS：そうです。映画は、学問が人びとの「外側」（”outside”）にあるのではないということを示す一つの方法です。そこには、描写されたり研究されたりしている人びとの「内側」（”inside”）が含まれています。あなたの観点はここにあります。ドキュメンタリー映画は内省の空間です。私たちは内省に適したこうした空間を作り出すために研究しています。そして、社会学者が置かれている状況にはない人びとと意見を交わすやり方として、また同時に、何か新しいものを作り出すやり方として、私たちは研究しているのです。それは出会いの場です。それは観点の多様性に入り込む一つの方法なのです。映画のなかの人びとは研究の役者であると私たちは考えています。映画によって、人びとが実際にそうである姿を見ることができます。人びとは考えています。人びとはたんなる対象（objects）ではないのです。

JPD（ジャン＝ピエール・デュラン）：社会学者が映画やビデオの使用価値を認めるのが比較的遅かったとしたら――人類学者と比べて遅かったとしたら――、それは、社会学が、アフリカやインドネシアなどではなく、自分たちと同じ場所にいる人びとを研究することから始まったからだと思います。社会学者は自分自身が馴染みのある社会について語る際、研究テーマに関する選択、すなわち現実の断片化を行ないます。ましてや、それを書き記すともなると、こうした選択はいとも簡単に行なわれます。ですが、社会学者にとってもっとも重要なことは、私たちが述べていることではなく、私たちが省略していること――すなわち、残余です。映画の社会学を作り上げようとすると、残余部分を選択したり省略したりすることがずっと難しくなるのです。

JM：実際の経験から、あなた方が行なってきた選択の例などを挙げていただけますか。

JPD：たとえば［私たちが撮ったドキュメンタリー映画である］『ラインの上の夢』のなかで、私たちは労働者と労働組合との関係性については多くを表現しませんでした。最小限にとどめました。そして、労働者のなかには、組合について非常に悪く言う者もいました。組合は……

JS：怠け者。

JPD：そう、怠け者のための組織だと。労働者の一人がそう言っていました。そして、ある女性はこう言っていました。「私は労働者です、私はストライキを行なうことはできません」。書き記していたとしたら、このコメントは長いインタビューのなかでのほんの一秒程度のことだったので、書きそびれていたでしょう。しかし、私たちは実際にこの映画のなかで、労働者たちが日本式の就業規則のような新たな労働条件をなぜそしてどのようにして引き受けているのかを示すために、そのコメントを使いました。労働組合は組合員らと一緒にやっていかなければならないのであり、だからかれらは沈黙し続けているのです。

JS：私たちは、人びとが重圧をかけられ非常に慌ただしく疲れた様子で仕事をしているのを目にしました。しかし、私たちがこうした人びとを撮影する段になると、かれらはとても落ち着いていて、とてもリラックスしていました。だから私たちは、かれらがいかに落ち着いて見えるかを表現しなければなりませんでした。しかしそのとき同時に、私たちはかれらにインタビューもしました。そこにいた全員が「仕事は大変だ、本当に大変だ」と言っていました。しかし、これはチャーリー・チャップリンの映画ではありません。全員がとても穏やかに見えるのです。だから私たちは、そのインタビューを映像とともに流しました。フィールドの観察をするときに目にするものが必ずしも人びとの感情の現実ではない、ということを示すために。こうして、私たちはこの映画を『ラインの上の夢』と名付けました。なぜなら、みんなここから、このラインから逃れることを夢見ているからです。
ですから、この映画は会話を始める方法なのです。それは、現実の単純化への挑戦、現実にたいして暴力をふるう単純化への挑戦なのです。

JPD：ジョイスが言ったように、映画の社会学は主観性の社会学（subjective sociology）です。しかしそれは理性的な知でもあります。私たちは自分の観点を持っています。私たちは自分自身の主観性を身につけています。しかし［映画の社会学を作り上げることは］本や論文を書くよりもずっと難しいことです。確かに私たちは――撮影したり編集したりなどというように――選択することができます。それはその通りです。しかし、撮影する際には、不都合な事実を簡単に省略することはできません。これは大きな難問です。私は15冊くらい本を書いてきましたが、重要なことを示すやり方や一冊の本のなかで議論を展開するやり方は知っています。しかし、映画では同じやり方で議論することはできません。というのも、事実――社会的事実――は、あなたの目の前にあるのですから。ときに社会学者たちは［現実を作り変える］魔術師にでもなりうるかのように言われることがありますが、映画の社会学を行なう際にはそうはいかないのです。

JM：映画の社会学者として、社会におけるあなた方の役割についてどのようにお考えですか。

JPD：社会生活のなかに隠れていることを明らかにするのが私たちの役割だ、と私は考えています。物事を理性的に説明するためだけでなく、研究対象にしなければならない人びとに耳を傾けてもらい関心を持ってもらうためにも、私たちは感情をも扱わなければなりません。書き記すことによって、抑制された感情のような、私たちの感情にある複数の層を表現するのは、より難しいことだと私は考えています。

JS：たとえば、私たちはボストンのとある貧困地域におけるアファーマティブ・アクションについての映画のなかで、ある女性と心動かされるインタビューを行ないました。彼女が応答する仕方は、彼女の気高さ、そして感情の抑制を物語っていました。彼女はこのようにして、暴力を用いるという選択をする者たちに挑戦していたのです。私は、人びとの気高さを示すことも重要だと考えています。

JM：映画の社会学において、人びとを説得させるために感情的なものを特定のやり方で用いるということが、作為的だと批判される可能性を残すとお考えですか。それとも、感情的なものを用いることが、人びとの理解を得る別の道筋をもたらしてくれるとお考えですか。

>>

JS：何かを理解するためにたった一つしか方法がないわけではありません。私たちの理解は、理性的であるばかりではないのです。感情を伴った理解もまた理解です。事実、その方がもっと理解できることもあると思います。しかし、本を書くときに作為的になることもありうるわけですし、もっともその方がずっと簡単であることも事実でしょう。
しかし、映画はフィールドで出会う人びとと築く関係性を変えてしまうことも事実です。私はパリ近郊の自動車工場のラインで、エスノグラフィー調査を行なっていました。そのとき、ある労働者が私にこう言いました。「君は調査をしていると言っていたね、私たちが手伝うよ。でもその調査が終わっても、私たちには何も残らない。私たちには何の見返りもないんだ。君のキャリアになるのは構わないのだが」。

JM：搾取のようですね。

JS:そう、搾取みたいですよ。でも、映画のなかで話す人びとを見るとき、かれらは存在しています。かれらに何か説明すれば、それはまた別種の搾取かもしれません。しかし、少なくとも今や、私たちはかれらにこう言うことができます。「あなたは存在しているんだ」。あなたは考えている。あなたは話している。そして、観衆はかれらの身体的な表現を見、かれらの声のトーンを聞くことができるのです。
そして、こういった人びとがけっして陰などではなく、実在する人間であるということを示すのがとても重要です。かれらは考えているということを示すのがとても重要なのです。あなたはかれらの言葉を聞き、かれらの顔を見る。私たちはかれらにパートを与えているのではありません。かれらが映画のなかで自分自身のパートを担っているのです。

JM：あなた方が映画の社会学者として直面している難問は何ですか。

JPD：多くの人びと――公衆、社会学者、多くの科学者――には、表象（images）や写真を読む能力が欠けています。私たちは学校で、言葉を読んだり書いたりすることは学びますが、画像を読むことはまったく学びません。映画評論家、写真評論家、写真鑑定家などといった、映像（film）に関わる専門家たちもいます。しかし、こうした専門家たちと公衆との間には非常に大きなギャップがあります。これは問題です。公衆――そして多くの社会学者――が表象（images）を読むことができないからです。おそらくこのことが、映像と映画の社会学者として私たちの抱える最大の難問です。

JS：表象（images）分析には教育が必要ですし、映画を製作するためには、ある表象（images）を作り上げることが何を意味しているのかを理解しなければならないのです。

JPD：映像（picture）のなかでは、映像にたいする感触（feel）を得ます。しかし、映像を見るとき、その映像が撮られた場所やフレームの外側に（outside）あるものについても考えなければなりません。

JS：ある表象（image）を示すとき、その外側に何かがあるのです。

JPD：ここにフレームがあります。でも、あなたはたいていフレームの外側にいます。

JS：社会学者にとっても同じです。見えるものと見えないものを探しているのです。

現在制作中の、セバーグとデュランによるアファーマティブ・アクションについての2つ目の映画のワンシーン。 タイトルは "Mississippi, Columbus, Boston : une trajectoire familiale [From Mississippi to Boston: a Family Trajectory]"。この作品は あるアフリカ系アメリカ人が奴隷からハーバードへたどり着くまでの道のりを辿ったものである。

JDP：コンテクストということですね。

JS: そう、コンテクストです。フィールドの外側にあるもの、あなたの目の前にいる人びとの背後に隠れているもの、それがコンテクストなのです。

JPD：そして、多くの人びとはフレームのなかにある事実について考えるにすぎません。しかしそのやり方では、より広い社会、すなわち「大きな絵図」（big picture）とのつながりを理解することはできません。

JJM：先ほど、表象（images）を理解するために教育が必要だと話してくださいました。優れた映画の社会学を作り上げようということになれば、その教育はずっと重要なものだと私は思います。あなた方がエヴリ大学で修士課程を始めることになった経緯をお聞かせ願えますか。

JPD：エヴリ大学は1990年代初頭に、パリ郊外の四大学のうちの一つとして開校しました。私は産業社会学者として就任しました。学長は改革に好意的な、非常に優秀な方でした。ジョイスが彼のところへ行き、映画の社会学の可能性について議論しました。すると彼は「資金はないが、あなた方がお金を工面することができるのならサポートするよ」と言ってくれました。

JS：ジャン＝ピエールがお金を工面してくれました。彼は自動車産業で調査を行なっており、経営者側が大学のために資金面のサポートを買って出てくれました。かれらが私たちにお金を与えてくれ、私たちはそれで一台目のカメラを購入しました。さらに、大学でこうした教育体制を整えるため、一年目のとき私は次のように言いました。「それでは、もし本課程に所属し本課程で教鞭を執りたいならば、本学の（colleagues）すべての教育を理解しなさい」。それは、音響、脚本制作、監督、編集などすべてを学ばなければならないということですが、同時に、社会学、歴史学、人類学、ドキュメンタリーの歴史、表象（images）分析の講義を受けるということでもありました。私たち全員が、一年のうちにこれを成し遂げました。その後、私たちは、作り上げた教育課程を認めてもらうために高等教育研究省（Ministry）に依頼し、結果、認められました。こうして、1997年に私たちは修士課程「表象と社会」（Image and Society）を開設しました。この

課程は、学位論文のために映画を製作したいというあらゆる学生を募っています。学生は自分自身で映画製作を行なわなければならないのです。

JPD：この修士課程は、二重の能力、すなわち、技術、映画、著述などの能力だけでなく、社会科学の知識も要する、唯一の課程でした。

JM：二重の能力を要する唯一の課程とおっしゃいましたが、それはフランスでですか。それとも世界でですか。

JS：世界のことは知りません！現在、フランスでは他にもそうした課程を増やそうとしています。しかし、おそらく私たちの修士課程が最初だったと思います。

JPD：現在、私たちは1年に20人の修士課程の学生と7人の博士課程の学生を抱えています。

JM：現時点で、あなた方は主として専門家を養成していますが、それは研究者としては損失だとお考えですか。言い換えれば、映画の社会学という流儀を発展させたいわけではないとお考えですか。それとも、ここで学んだ学生や専門家たちも自分自身を映画の社会学者と考えていると思われますか。

JPD：それはかれら次第です。社会活動や政治活動にかなり傾倒している学生もいます。また活動家としてのここの修士課程にやってくる学生もいます。私たちはかれらに、活動主義（activism）だけではよいドキュメンタリー映画を製作することはできないと話しています。なぜなら、活動家であるならば、ある特定の観点をもつことになり、他の物事を見たいと思わないからです。したがって、より広い観点を身に付けるために自分たちの考えを変えなくてはならないとかれらに教えるのに、およそ6か月を要します。こういった性質の人びとは、いったん理解すると、非常に優れた映画製作者になりえます。なぜなら、かれらは自分のなかで社会に関与しているからです。

JM：では、博士課程の学生についてですが、かれらは教鞭を執ることに関心があるとお考えですか。

JPD：ドキュメンタリー映画製作者になりたいと考えている学生もいます、しかしより高いレベルのです。そして教員になりたいと考えている学生もいます。そう、研究者ですね。しかし、それは非常に難しいことだということをかれらは理解しています。なぜなら、社会学者は一般にまず映画の社会学を独自のフィールドと考えているからであり、私たちにはやるべきことがたくさんあるからです。私たちはそれに向かって動いています。映画の社会学に開かれている大学は3、4校しかありません。ポジションは多くはなく、それが私たちの抱えている問題の一つでもあります。私たちは、映画の社会学が発展していくその始まりにいるのです。（堀田裕子訳）■